短縮版

女性たちよ、私たちを赦してください！



結婚と教会における男性と女性
短く。分かりやすく。役に立つ。

HANS-JÖRG RONSDORF

女性たちよ、
私たちを赦してください！

短縮版

結婚と教会における男性と女性

短く。分かりやすく。役に立つ。

Hans-Jörg Ronsdorf

ドイツ語版のペーパーバックは www.hans-joerg-ronsdorf.de からご注文いただけます。

価格は3.80ユーロ（送料別）です。

ドイツ語版はKindle電子書籍でも入手できます。

第4版、2026年11月（ドイツ語版）

ドイツ語からの翻訳、2026年――www.hans-joerg-ronsdorf.de から無料でダウンロードできます

© Hans-Jörg Ronsdorf――無断転載を禁じます。

Albis 6½, 87477 Sulzberg

組版：Hans-Jörg Ronsdorf

連絡先メール：hj-ronsdorf@t-online.de

ドイツ語版ISBN 978-3-9820715-6-5

表紙デザイン：トビアス・シュトリッカー（Tobias Stricker）

校正：ガブリエーレ・ジンガー（Gabriele Singer）

印刷：www.wir-machen-druck.de

ドイツ語版で使用している聖書翻訳（特に断りのないかぎり）：

エルバーフェルト訳〔Elberfelder Übersetzung、ドイツ語聖書翻訳〕、Edition CSV, Hückeswagen www.csv-bibel.de

日本語訳の聖書引用は、原則として日本語の標準的な聖書（新改訳2017、口語訳）の言い回しに沿っていますが、著者がドイツ語訳の文言に基づいて論じている箇所は、ドイツ語から訳しています。

目次

1 序文——なぜもう一冊の本なのか **6**

2 私たちの土台——私たちは何に依り頼むのか **9**

3 初めに立ち返る——神が望まれたこと **11**

4 創造の秩序——あるとすれば、どの秩序か **15**

5 やがて来るもの——しかし神が決して望まれなかったこと **17**

6 キリストであるイエスと女性たち **23**

6.1 ヤコブの井戸のサマリアの女 **24**

6.2 イエスの足もとで——マルタとマリア **25**

6.3 マグダラのマリア——使徒たちのための女性使徒 **25**

7 花嫁なる教会と女性たちの奉仕 **27**

7.1 パウロと女性の同労者たち **27**

7.1.1 フィベ——女性執事、指導者、手紙の運び手 28

7.1.2 模範的な夫婦——プリスカとアキラ 28

7.1.3 ユニア——名高い女性使徒 29

8 姉妹たちに沈黙の命令はあるのか **31**

8.1 預言の吟味 **32**

8.2 34節と35節は引用か **33**

8.3 34節と35節は後からの挿入か **34**

9 姉妹たちに教えることの禁止はあるのか **37**

10 万人祭司 **42**

11 姉妹たちは女性長老になってよいのか **44**

12 かぶり物——今もなお？ **48**

13 かしらとしての夫——一方的な服従？ **54**

14 男性も女性もない **58**

15 私たちの罪の告白 **61**

16 結びに **63**

17 著者のその他の本 **67**

1 序文——なぜもう一冊の本なのか

2020年11月、私の本『女性たちよ、私たちを赦してください！』（Frauen, vergebt uns!）が出版されました。予想どおり、無理解や、憤慨さえも避けられませんでした。聖書に忠実な兄弟たちは、この書名によって、いわば人質に取られたように感じたのです。自分たちの女性観は聖書にかなっているのに、なぜ赦しを請わなければならないのか、というわけです。

問題は今も、二つの対立する立場をめぐるものです。下の対照表もご覧ください。

> 一方の立場は、女性のかしらとしての男性の権威を主張します。創造の秩序は、堕落の前からすでにそうであったというのです。だから妻は夫に従い、礼拝では黙っており、教会の内でも外でも男性を教えたり指導したりしません。
>
> これと対立する立場は、創造の初めから、平等と相互の補い合いに基づくパートナーシップを見ています。上下の差はありません。互いに従うことが、ともに生きる姿を形づくります。教会では、姉妹たちも兄弟たちとまったく同じように、あらゆる分野で奉仕します。

両方の立場が聖書によって根拠づけられています。しかし、この二つの世界観は相いれません。多くの本を学び、講演を聞き、数多くの議論を重ねた末に、私はそう結論しました。神に嘆かずにはいられません！　私たちは難しい神学上の争点の前に立っています。残念ながら、それは教会を分裂させています。この問題について、もっと率直に、もっと冷静に、もっと平和に議論が交わされることを願っています。

この小さな本で、私は二つ目の立場を支持し、説明します。一つ目の立場を、私は54歳になるまで主張し、教えていました。聖書を学ぶことによって、私は二つ目の立場に移らざるをえなくなりました。そのことについて、私は詳しい本を書きました。多くの姉妹たちにとって、その本は、長い間、意識的にせよ無意識的にせよ待ち望んでいた解放であり、心の重荷が軽くなることでした。寄せられた感想の中には、喜びのゆえに、また悲しみのゆえに、私を涙させたものもあります。このテーマについては、今もなお多くのことがうまくいっていません。その責任は、自分は聖書を正しく理解していると考える兄弟たちにあります。彼らは自分たちの理解に基づいて、女性が礼拝で発言すること、教えること、指導の務めを担うことを禁じ

ています。多くの姉妹たちは、それを理解することも、納得することもできません。多くの人がそのことで苦しんでいますが、そのことについて黙っています。

今では私の本もある程度は広まりましたが、兄弟たちの中にはそれを読むのを拒む人々がいます。複雑すぎる、長すぎる、一方的すぎる、偏りすぎている、フェミニズム的すぎる、と言うのです。そこで、もう一度、この短くて分かりやすい本を書きました。さらに詳しい資料については、私のホームページをご覧ください：**www.hans-joerg-ronsdorf.de**。

神の前で自分は正しいことをしていると確信していても、それでも私は間違っているかもしれません。けれども私は、キリストとそのみことばに対して責任を負っています。私もまた自分の良心に縛られています。これは単なる神学上の、あるいは抽象的な争点ではありません。キリストのからだの半分にかかわること、人々とその人生にかかわることなのです！

Hans-Jörg Ronsdorf、Sulzberg、2026年11月

男性と女性の階層的な見方：服従、権威、かしら——階層重視	**階層のない相互の補い合い：ガラテヤ人への手紙3章28節——キリストにあって皆が一つ！——賜物重視**
創造の秩序における階層。男性は女性の上に立つ。価値は等しいが、権利は等しくない。	対等な者として造られ、両者とも神のかたちを担う者。互いに補い合い、同じ目の高さで、等しい立場にある。
創世記3章16節「彼はあなたを支配する」は、堕落の否定的な結果としてではなく、規定・命令として理解される。	創世記3章16節は、神が望まれなかった堕落の悲しい結果を描いている。残念ながら、歴史の中でそのとおりになってしまった。
エバはだまされた。だから女性は教えてはならない。	アダムは故意に罪を犯し、エバは惑わされた。教えることの禁止は性別に関するものではなく、その教えが福音にかなっているかどうかに関するものである。
女性は教会では黙っている。自分の家でも、教えにかかわることでは夫に対して静かにしている。	ペンテコステに起こったように、男性と女性がともに預言する。ヨエル書2章28-29節、使徒の働き2章17節
かしらであることは、男性の権威を意味する。	かしらとからだは、一致と相互の依存を強調する。
女性は男性に対して権威を持ってはならない。	互いに従うこと。からだに対する権利と権威は相互的である。コリント人への手紙第一7章4節
男性だけが指導し、長老や執事になることができる。	霊の賜物は性別に縛られていない。
ガラテヤ人への手紙3章28節「男と女もありません……あなたがたはみな、キリスト・イエスにあって一つだからです」は、救いにおける霊的な平等だけを意味しており、創造の秩序を廃するものではない。	ガラテヤ人への手紙3章28節は、キリストにある新しい創造を描いており、それは教会の中ですでに現実となっている。まさにそこでこそ、あらゆる社会的、身分的、性別的な違いが完全になくなる。

2 私たちの土台――私たちは何に依り頼むのか

キリスト者のすべての行いにとって決定的であり、まさにその規範であるのは、聖書だけです。今も、これからも。今日私たちの手元にあるとおりの聖書です。それは私たちの唯一の、信頼できる源です。すべてのことは聖書によって吟味されなければなりません。伝統もそうです。非常に古いものであれ、比較的新しいものであれ。しばしば、聖書の真理――あるいはむしろ、私たちがそれをどう理解しているか――とキリスト教の伝統とが同一視されます。伝統は、誤った聖書理解に基づいていることがあります。時代精神に合わせることも、同じように人を誤らせます。そうなると、時代遅れになった確信や慣習が、時とともに積み重なり、固まっていきます。それらは過去の何世紀、あるいはほんの数十年の文化を映し出しているにすぎないからです。

それらは福音の妨げになります。

さて、少し大げさに、こう言われることがあります。聖書を使えば何でも証明できる、と。これは実に私たちにとっての挑戦です。この言葉は真実だからです。キリスト者の間には、互いに矛盾する意見がどれほどたくさんあることでしょう。そのどれもが、多かれ少なかれ聖書によって根拠づけられているのです。聖書のテーマで、少なくとも二つ、あるいはそれ以上の解釈がないものはありません。

聖書を読むとき、またそれを私たちの個人の生活や教会の生活に適用するときに、心に留めるべき規則や原則があります。私たちのテーマにとっても、ほかのどのテーマにとっても大切なものを、いくつか挙げてみます。

その聖書箇所はだれに語っているのか。 旧約聖書の指示、たとえば祭司への指示は、今日の教会生活にはもはや当てはまらないでしょう。これは「救済史的な聖書解釈」と呼ばれます。その言葉が、どの時代において、どの時代のために有効なのかに注意を払うのです。その言葉はイスラエルという民族に向けられているのか、それとも新約の教会に向けられているのか。

教会生活についての指示は、はっきりしていて明確で、何度も出てくるか。 そうであれば、規範的で、時代を超えた定めだと言えます。これに対して、難しい聖書箇所、特にその中心的な主張が新約聖書に一度しか出てこず、聖書に忠実な多くの神

学者や解釈者の意見が一致していない箇所を、一般に拘束力のある規範にすべきではありません。

文脈が決定的です。 文脈から切り離された言葉こそ、どんなことでも、どんな教えでも支持できてしまいます。結局のところ、私たちはほかの文書を読むときにもこの規則に従っています。その際に大切なのは、すぐ前後の文脈だけでなく、最終的には聖書全体の文脈です。問題は、その解釈が聖書全体の姿にもかなっているかどうかです。

同じように、ある聖書箇所が書かれた時代と場所についての**歴史的な文脈と背景**も大切です。そのような知識がなくても聖書を読むことはできます。それによって聖書の神的な力が失われることはありません。しかし、歴史的な背景を知ることは、いつでも役に立ちます。新約聖書のほとんどすべての手紙は、差し迫った事情があって、それぞれの教会に書き送られたものなのです。私たちはその事情を再構成しようとします。

時には、**ある語が原語で何を意味するか**が重要です。聖書のヘブル語とギリシア語は今日ではもう話されておらず、私たちはまったく別の言葉を話しているからです。正確な翻訳は大切です。しかし翻訳もまた、いつもある程度の解釈です。そして、翻訳者があれこれのことについてどう考えるかによって、その翻訳は影響を受けるでしょう。その例は十分にあります。

最後に、ここで指摘しておきます。あることは**文字どおりに、字義どおりに**、ほかのことは**比喩的に、たとえとして**理解しなければなりません。このことは、もしかすると創造の物語の一部にも当てはまるかもしれません。

3 初めに立ち返る――神が望まれたこと

男性であること、女性であること、そして両者の関係を理解したいと思うなら、どこから始めればよいでしょうか。もちろん、創造の物語へ行くのです。それは私たちに最も大切な材料を与えてくれます。新約聖書では、パウロが何度かこの初めに言及しています。コリントとエペソでの問題の多い弊害を批判し、正したときのことです。彼は創造の記事を、あるときは一般的に、しかしまたあるときは特定の状況に当てはめて用いています。**パウロの言葉によってだけ、この創造の記事を解釈するのでは十分ではありません。** まず私たち自身もエデンの園に行き、そこで何が、どのように起こったのかを見なければなりません。パウロについては後で戻ってきます。

人類の歴史の初めに行ってみましょう。エルバーフェルト訳聖書〔Elberfelder、ドイツ語聖書翻訳〕の本文を紹介します。

> 創世記1:26-28 神はまた言われた。「われわれのかたちに、われわれにかたどって人を造り、これに海の魚と、空の鳥と、家畜と、全地と、地を這うすべてのものとを治めさせよう！」神は自分のかたちに人を創造された。すなわち、神のかたちに彼を創造し、男と女とに彼らを創造された。神は彼らを祝福された。神は彼らに言われた。「生めよ、ふえよ、地に満ちよ、地を従わせよ。また海の魚と、空の鳥と、地に動くすべての生き物とを治めよ！」

創造の第六日、まず動物たちが造られた後で、人が舞台に登場します。男と女としての人です。二つの性が、ひと息に挙げられています。両者とも、それぞれ一人ひとりとして、また一緒に、神のかたちを担う者です。違いはありません。序列はありません。階層はありません。両者は一緒に被造物を治めるべきなのです。 それは、被造物を思いやりをもって管理し、守ることを意味します。そのためには両方の性が必要です。

第六日、世界はまだ秩序が保たれており、あるべき姿のままです。

もう一つの記事があって、それは人の創造の出来事に、いわばズームインしていきます。旧約聖書、すなわちヘブル語聖書のこの非常に古い本文は、確かに神秘に満ちていて、今日の私たちにはそれほど簡単には理解できないかもしれません。ここでも、何が文字どおりで、何が比喩として意図されているのかという問いが生じま

す。今日を生きる私たちには、答えの出ない問いが残ります。私たちなら、おそらくこの記事を違うふうに、あるいはもっと詳しく書いたことでしょう。しかし私たちは、与えられているもので満足しなければなりません。すべては本質的に、私たちにとって理解でき、筋が通っており、また深い意味を持っています。神だけが、これらの出来事を私たちに啓示することがおできになります。二人の人がその場にいたとしても、それを書き記したのは彼らではなく、後のモーセです。

次の記事から、アダムが先に造られたことが分かります。

> 創世記2:18-20 また主なる神は言われた。「人がひとりでいるのは良くない。彼のために、ふさわしい助け手を造ろう。」そして主なる神は野のすべての獣と、空のすべての鳥とを土で造り、人のところへ連れて来て、彼がそれにどんな名をつけるかを見られた。人がすべて生き物に与える名は、その名となるのであった。それで人は、すべての家畜と、空の鳥と、野のすべての獣とに名をつけた。しかしアダムには、ふさわしい助け手が見つからなかった。

アダムはひとりです。創造主は、どの動物も彼にふさわしくないことをはっきりさせます。この瞬間、アダムに必要なのは家畜ではありません。忠実な友としての犬でもありません。そうではなく、彼にふさわしいだれかが必要なのです。心と思いで通じ合う友です。向かい合う相手です。それなら神は、ひとりでいること、孤独を終わらせるために、二人目のアダムを造ることもできたのではないでしょうか。しかし、彼に欠けているのは二人目のアダムではありません。彼に欠けているのは助け手です。彼にふさわしい者です。つまり人間です。同じ力を持つ者です。 欠けているのは、しもべや助手ではありません。そういう者も助けることはできるでしょう。しかし、彼にふさわしい者ではないでしょう。彼の下に置かれる者になるでしょう。大切なのは、向かい合う相手、彼のような人を見つけることです。同じように強い人格です。その人と一つになることができるのです。彼の存在のあらゆる面に対応し、それを補う者です。

アダムが先に造られたのは、彼がかしらや指導者となるためではありません。 そうではなく、ひとりでいることを経験し、それを感じるために、先に造られたのです。それは、彼にふさわしい助け手と出会い、ともに生きるための備えなのです。

女性の創造を描く次の本文は、神秘に満ちていますが、同時に多くのことを語っています。

> 創世記2:21-22 そこで主なる神は人を深く眠らせられたので、彼は眠りに落ちた（entschlief）。主はそのあばら骨の一つを取って、その所を肉でふさがれた。主なる神は人から取ったあばら骨でひとりの女を造り、人のところへ連れて来られた。

眠っているアダムのわきから、神は最初の女性を形造られます。翻訳について一言。エルバーフェルト訳はここで entschlief という語を用いていますが、このドイツ語には「永眠する、亡くなる」という意味もあります。しかしアダムは永眠したのではありません。もしそうなら、彼は死んでいたでしょう。また、ここで言われているのはあばら骨一本ではなく、彼のからだのわき腹のことです。

このわずかな言葉から、私たちは何を学ぶでしょうか。女性は男性から取られたのであって、土から形造られたのではありません。彼にふさわしい者となるためです。彼女は彼のわきから取られ、それから女性として――比喩的に言えば――そのわきを再びふさぐのです。彼のわきから取られたのは、彼のわきで生きるためです。彼の下でもなく、彼の上でもありません。アダムを完全にする補い手として、そして人生経験から言えば、確かに彼女自身をも完全にする補い手としてです。対等な助け手が生まれようとしています。それは心の事柄、愛の関係となります。彼女は彼のわきから生まれたのです。

アダムとエバが同時に創造されなかったのは、もしそうであったなら、互いに依存し合い、一つであり、一体となることが、これほどの意味と深さを持ちえなかったからです。

神が女性を男性のところへ、花嫁を花婿のところへ連れて来られたその瞬間に、私もその場に居合わせたかったと思います。

> 創世記2:23-25 そのとき、人は言った。「これこそ、ついにわたしの骨の骨、わたしの肉の肉。男から取ったものだから、これを女（Männin〔ドイツ語。Mann「男」から作られた語〕）と名づけよう。」それで人はその父と母を離れて、妻と結び合い、一体となるのである。人とその妻とは、ふたりとも裸であったが、恥ずかしいとは思わなかった。

アダムはこの人に圧倒されます。彼は叫びます。「ついに私のような者が！」彼女は彼と等しく、しかし彼の女性版、すなわち「男から取られた女」（Männin）です。彼はすっかり心を奪われ、これから後、男たちは自分の家を離れて妻にすがりつくことになります。その逆ではありません。ここでは、男性のほうが女性のとこ

ろへ行くのです。一つの肉となるためです。霊とたましいとからだにおいて、ほかのだれとも分かち合わない一つとなるためです。心の交わりです。結婚の契約における結婚の交わりです。最良の友どうしとして。等しい価値を持つパートナーシップの中で。このような一つとなる交わりは、等しい価値と等しい地位を持つ二人の人格の間にしか生まれません。

アダムはそれを一目で見て取ります。彼の前に立っている人は、彼と同じ目の高さで向き合っています。体の大きさにおいてではないかもしれませんが、いずれにせよ人格としての本質においてです。二人は、相手を知ることによって初めて、自分自身を本当に知るのです。

二人は堕落の前の、汚れのない状況の中で出会います。恥を知らない彼らの裸の姿は、今日ではもうそのままの形では存在しません。その時がどれほど続き、どれほど楽しむことが許されたのか、私たちは知りません。私は、それはかなり長い期間だったのではないかと推測しています。

4 創造の秩序――あるとすれば、どの秩序か

今こそ、創造の秩序という概念を詳しく見るときです。しかもまさにこの場所、すなわち楽園においてです。そこではまだ罪が起こっておらず、男性と女性についての神のご計画とご意図を、まだ見て取ることができるのです。

多くの姉妹や兄弟たちは、この概念を、次のことを言い表しているかのように使っています。アダムが先に造られたので、彼が指導的な役割にある。より大きな責任を負っている。エバは彼の助け手として、彼のためにいるように造られた。そこから、女性は男性に従うと結論づけられます。すべてにおいてです。新約聖書も七回そう言っているとおりに。アダムはエバのかしらだ、というわけです。

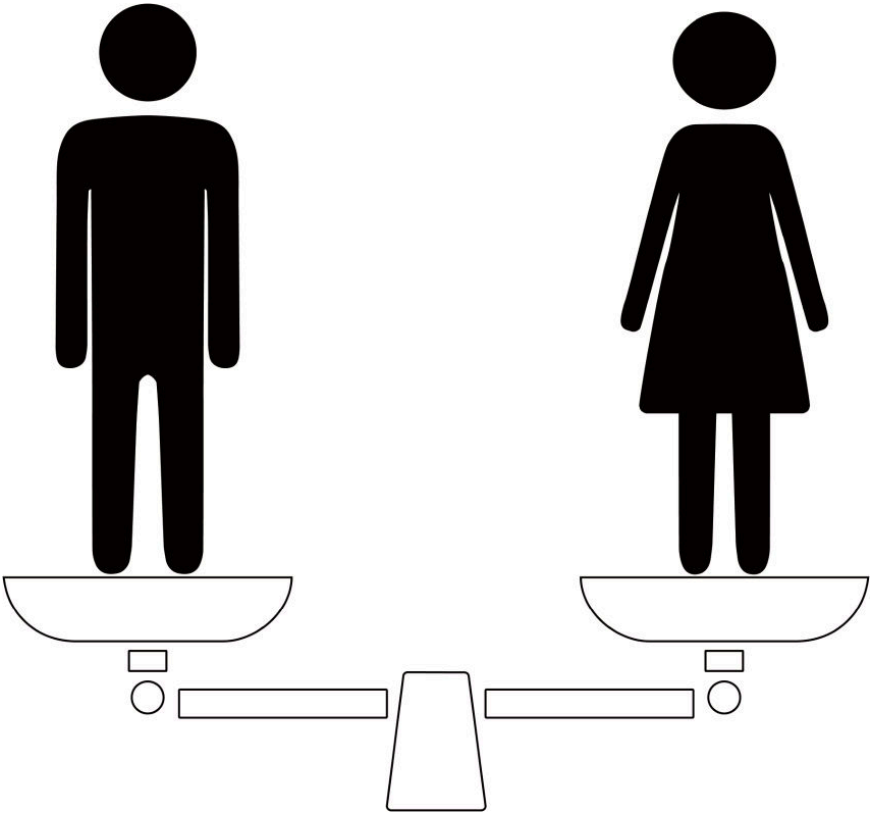
この見方は広く行き渡っています。創造の出来事についてのこの解釈は、新約聖書のわずかな言葉がきっかけとなっています。それらについては、これから見ていきます。

読者の皆さんは一人ひとり、この問いに自分で答えてみてください。**創世記1章と2章の本文だけを見るなら、そこに神が望まれたアダムの指導的役割が見つかるでしょうか。あるいはエバの服従が見つかるでしょうか。**

これらの本文には、階層も、服従も、指導や権威もありません。まったく逆なのです。私が上に描いたとおりです。私は認めざるをえませんでした。創造の秩序としての女性の服従は存在しないのだ、と。つまり、神が望まれた階層的な上下の段階も、地位も、役割もないのです。 **それはこの本文の中に読み込まれているのです。**

まさにそれゆえに、私は創造の秩序を擁護します。すなわち、堕落の前の秩序をです。 その後には、もはや創造の**秩序**について語ることはできません。堕落の日からは、**創造の「無秩序」なのです。この無秩序**に、私たちは倣うべきではありません。むしろ福音の光の中で、福音の力によって、それに抵抗すべきなのです。

そもそも「創造の秩序」という概念は、使うとしても控えめに使うべきです。この概念は、結局は私たちの解釈にすぎないものを捕らえて、固めてしまおうとするのです。



5 やがて来るもの――しかし神が決して望まれなかったこと

さて、いわゆる堕落の描写に目を向けましょう。蛇がエバを惑わし、実を取らせます。彼女はそれをアダムにも与え、彼もそれを食べます。前もって述べておきます。これらの悲劇的な行為から、女性は惑わされやすく、ここで勝手に主導権を握り、夫に従わなかったのだ、という結論が引き出されます。すでにユダヤ人たちも、教父たちも、そして今日に至るまでの人々も、そのように、あるいは似たように解釈し、それを女性というもの全体に当てはめてきました。

私の関心は主として堕落の直接の結果にありますが、一つ一つの段階を伝えている本文全体を紹介します。

> 創世記3:4-6 蛇は女に言った。「あなたがたは決して死ぬことはない。それを食べるその日に、あなたがたの目が開け、神のように善悪を知る者となることを、神は知っておられるのだ。」女がその木を見ると、それは食べるに良く、目には美しく、賢くなるには好ましいと思われたので、その実を取って食べ、また共にいた夫にも与えたので、彼も食べた。

アダムは、エバがいる前に、この木から食べてはならないという禁止を神から直接受けていました（2:17）。ですからエバは、おそらく彼からそれを聞いただけでしょう。さて、話をする蛇が彼女を惑わすことに成功します。どうやらアダムがその場にいるところでです。遅くともこの時点で、彼は割って入るべきでした。エバが弱くなり、誘惑と惑わしに負けたのと同じように、アダムも弱く、何の抵抗もせず、一言も言わずに、エバから禁じられた実を受け取ります。二人とも間違った振る舞いをし、二人とも致命的な過ちを犯し、罪を犯します。エバが惑わされたのに対して、アダムは惑わしも欺きもなしに、意識して神の禁止に背いて罪を犯したのです。

それから神は、この人間の夫婦と蛇に出会われます。皆、何が起こったのかを分かっています。神は一人ひとりに、起こったことについて直接お尋ねになります。意味深い答えが返ってきます。神は今、関わった者たちに次の順序で語りかけられます。

> アダム――エバ――蛇――エバ――アダム。

> 創世記3:13-15 人は答えた。「わたしと一緒にしてくださったあの女が、木から取ってくれたので、わたしは食べたのです。」そこで主なる神は女に言われた。「あなたは、なんということをしたのか！」女は答えた。「蛇がわたしをだましたのです。それでわたしは食べました。」主なる神は蛇に言われた。「おまえは、この事をしたので、すべての家畜、野のすべての獣のうち、最ものろわれる！　おまえは腹で這いあるき、一生、ちりを食べるであろう。わたしは恨みをおく、おまえと女とのあいだに、おまえの子孫と女の子孫とのあいだに。彼はおまえのかしらを砕き、おまえは彼のかかとを砕くであろう。」

アダムは自分の罪を自覚しています。いや、それほどでもないのかもしれません。すぐにその罪をエバになすりつけるのですから。こうして自分の妻に責任を負わせて、自分はうまく逃れようとするのは、情けなく、臆病なことです。[1] しかも神までもが間接的に責められます。神は彼にこの女性を贈ってくださったのであり、彼は彼女のことをあれほど喜んでいたというのに。**戒めを直接聞いて知っていたのは、彼女ではなく彼でした。彼はエバにきっぱりと「いけない」と言わなければならなかったのです。**

エバは自分の過ちを認めます。彼女は、自分を引き止めなかったアダムも、神も責めず、蛇を責めます。彼女は蛇から距離を置きます。この致命的な状況の中で、それが唯一正しいことでした。今や彼女は目を覚まされ、この敵に立ち向かう側に立ちます。この話し合いの中で妻の側に立たなかったアダムとは違います。

蛇はこの欺きのゆえに永遠にのろわれ、地を這うところにまで低くされます。エバは災いを引き起こした者をはっきりと名指しします。そしてすばらしい約束が与えられます。その広がりは、その当時はまだ見えていませんでした。彼女の子孫――読み違いではありません。ある男性の子孫ではなく、女の子孫です――が、蛇の頭を打ち砕くのです。

さて、エバへの、そしてアダムへの結果も告げられます。ここではエルバーフェルト訳よりも明確なチューリッヒ聖書〔Zürcher Bibel、ドイツ語聖書翻訳〕から引用します。

> 創世記3:16 女に向かってはこう言われた。「わたしはあなたにたくさんの苦労を与え、あなたの身ごもりを多くする。あなたは痛みの中で子を産む。
>
> あなたは夫を慕い求め、彼はあなたを支配するだろう。」

1. アダムはエバを目下の者と見なしてはいなかったようです。もしそうなら、目下の者に不意を突かれて言いなりになることはなかったでしょう。

蛇はのろわれますが、**女は違反を犯したにもかかわらず、のろいを受けていません**。これらの刑罰のことばは、意味を取れば次のようになります。

> わたしはきっと多くする。(1) 畑でのあなたの労苦を、そして (2) あなたの身ごもりを。
>
> あなたは苦労して子を産む。
>
> あなたの［愛する］思いはあなたの夫に向かう［だろう］。しかし彼は［反逆して自分の主人となり、そして］あなたを支配しようとするだろう。

苦労と骨折りとは、畑を耕す仕事のことです。そこでエバは、のろわれた地のゆえに、アダムとともに苦しみます。のろいは、二人のうちのどちらか一人にも、二人一緒にも下るのではなく、地に下るのです。その下で、二人とも苦しむことになります。

しかし希望があります。神がエバの身ごもりを多くしてくださるからです。 ですから、蛇を殺す子孫は必ず現れます。すでに初めに恵みが輝き出ています。そして、惑わしを受けたにもかかわらず中心に立ち、希望を約束されるのは、女性なのです。アダムではありません。

神は、罰として出産のときにもっと痛みを味わわせるために、女性の体のつくりを変えられるのではありません。彼女はこの時までまだ一人の子も産んでいません。骨折りとは出産の痛みのことではなく、畑を耕すことなのです。

それでは、夫との関係について述べている部分に移りましょう。これは約束ではなく、悲劇的なことばです。それは数えきれないほど多くの女性たちにとって、苦しみと抑圧の歴史の始まりを告げるものとなりました。男性たちはそれを恥じなければなりません。**男性が女性を支配することは神のみこころではなく、男性の罪深い、堕落した意志なのです。それがこのことばの本当の意味です。** それは守るべき創造の秩序を描いているのではありません。 それは無秩序を描いているのです。創世記1章と2章の良い秩序が、ここで崩れ、壊れてしまったからです。

このみことばを女性の服従の根拠とする人は、蛇の側に立つことになります。蛇には、エバと蛇の間に敵意があるだろうと予告されていました。蛇は攻撃者でした。男性の支配を利用し、今もなお利用して、どこであれ、どのようにであれ、可能なかぎり女性を差別してきたのです。女性から、蛇に打ち勝つ方が来ることになっていたからです。ですから、女性を攻撃し、弱らせることが肝心だったのです。

男性と女性は、ともに治めるように召されていました。 しかし男性は支配権を奪い取り、女性を弱い性として屈服させ、自分に仕えさせるようになります。家父長制という概念は、エデンの外での女性の悲しい運命を、おおむねよく言い表しています。わずかな例外を除いてです。

もともとの関係は、互いに支え、強め合う関係でした。平等で、対等な者として相手を認め、相手をいちばん身近な連れ合いとする関係でした。それが、ひどく乱れた関係になってしまったのです。感情の面で釣り合わず、力によって成り立ち、しばしば愛のない関係です。 女性は夫を、そして夫の愛情と信頼と守りを慕い求めるでしょう。しかし彼は彼女を押さえつけるのです。恐ろしいものが割り込み、すべてがひっくり返ってしまいました。

この男女の争いは、その後、どの民族の、どの文化の、どの層にも現れてくるでしょう。それは、引き金となった悪がその根から取り除かれるときにしか癒やされません。

最後に、アダムへの刑罰のことばを見ておきましょう。それは本当に暗いことばであり、結局のところ、人生と生存の戦いを彼とともに分かち合う女性にも当てはまるものです。

> 創世記3:17-19 更にアダムに言われた。「あなたが妻の言葉を聞いて、『食べてはならない』とわたしが命じ、語った木から取って食べたので――地はあなたのためにのろわれよ。あなたは一生、苦しんで地から食物を取る。地はあなたのために、いばらとあざみとを生じ、あなたは野の草を食べるであろう。
>
> あなたは顔に汗してパンを食べ、ついに土に帰る。あなたは土から取られたのだから。あなたは、ちりだから、ちりに帰るのだ！」

エバのためではなく、アダムのために地はのろわれています。彼の罪のほうが大きいように思われます。エバはむしろ被害者であり、彼は加害者でした。女の子孫、すなわち彼の助け手として与えられた女性の子孫が、さらに先の未来においても彼の助けとなります。彼女の子孫（イエス・キリスト）が、復活のときに彼をちりの中から引き出し、いのちへと連れ出してくださるのです。いつの日か、私たちもアダムと話すことができるでしょう。そのとき、彼がまだそのことについて話したいと思うならばですが。

一方の性が他方の性より優位にあることが初めて言及されるのは、創造の物語においてではなく、堕落の物語においてです。しかもここで言われているのは、生まれ

つき備わった優位ではなく、力と強さと暴力によって不当に、神の創造の秩序に逆らって行使される優位なのです。 創造主がエバに語られたことば、「あなたは夫を慕い求め、彼はあなたを支配する」（創世記3:16）は、罪深い人間の状態において、男性が自分に向けられた女性の自然な慕わしさを利用して、彼女を支配し、屈服させることを意味しています。女性が屈服させられていることは、まさに男性の堕落した本性の症状なのです。キリストのご生涯とみわざが堕落の結果を克服することを意味するのなら、この壊れた関係に、そして女性の屈服と搾取に、それがどのような影響を及ぼすかは明らかです。キリストは彼女を解放し、連れ出してくださるのです。そして、そのとおりになりました。

聖書が示す男性と女性の創造の秩序
Hans-Jörg Ronsdorf 10.4.2021
初めに：
良い創造の秩序
創世記1-2章
同じ価値、
補い合い、
階層秩序なし
神との調和、
互いの調和
堕落の後 創世記3章：
創造の「無秩序」
神との調和、
互いの調和が
罪によって汚され、
壊された
偶像礼拝、
家父長制、
服従の強制、
奴隷制、
搾取など
イエスが
罪に勝利する。
回復が
始まる。
イエスの死と
復活によって
新しい創造が
始まる
福音は人を変える。
教会では、
私たちが戦うべき
罪の結果が
消えていく。
新しい天
新しい地
エデンにまさる
黙示録21章と22章
キリストにあって、
新しい創造では、
性はもはや
何の役割も
果たさない。

6 キリストであるイエスと女性たち

主イエス・キリストが堕落の結果を克服されるのは、贖いのみわざによってだけではありません。2000年前、ユダヤ的であると同時にギリシア・ローマ的でもあった環境の中で、イエスが女性たちに接し、彼女たちと出会われたその仕方は、まさに女性たちにとって新しい時代の始まりでした。このような男性は、それまで一人もいませんでした。まるで神が、男性に女性への接し方を示すために、肉体をとった一人の男性として来られたかのような印象さえ受けるかもしれません。

イエスは、小言を言わずに戒め、見下すことなくほめる預言者でした。彼女たちの問いや苦しみや言い分を真剣に受け止められました。まったく自然に彼女たちと接し、その女性らしさをあざけることは決してありませんでした。これは当時の文化で普通だったこととはまったく違います。当時は、女に生まれなかったことを神に感謝する時代でした。妻は所有物であり、ささいなことで離縁状を渡して追い出すことができました。女性も子どもも、つらい境遇に置かれていました。解放と男女同権の時代に西洋世界で生きる私たちには、想像もつかないほどです。メシアはエバの娘たちを顧みられました。**イエスのもとには、女性の階層的な服従を示すものは何一つありません。教会でも、結婚でも、社会でも、話すこと、指導すること、教えることを禁じるものも何一つないのです。**

一人の女性が、いのちのことばをこの世に産みました。多くの女性たちが、十二人と同じようにイエスに従い、仕えました。彼女たちは、十字架へと向かう最もつらい道にもついて行きました。弟子たちがとうに逃げ去った後も、十字架のそばにいました。よみがえられた方が最初に姿を現されたのは、一人の女性でした。空の墓のそばにいた女性たちが、復活の証人となります。当時の文化では、女性は法的な意味での証人にふさわしいとは見なされていませんでした。イエスはこの差別をあっさりと取り除かれたのです。

紙面の都合で、イエスが出会われた多くの女性たちの中から三人だけを取り上げ、上に述べたことをイエスの歩みの中に確かめてみましょう。

6.1 ヤコブの井戸のサマリアの女

ヨハネの福音書4章を読み、この物語の中に入り込んでみてください。真昼の暑さの中、だれも水くみに来ない時刻、その時にだけ、彼女は思い切って井戸に来ます。そしてそこで、イエスがこの女性を待っておられます。彼女に会うために、イエスは大きく回り道をされたのです。彼女は五人の男に捨てられ、次から次へと渡され、使い古されてきました。生きていくために、六人目の男に身を寄せるしかなく、地に落ちた評判を抱えて暮らしていました。当時、男性が人前で女性と話すことはありませんでした。ましてユダヤ人がサマリアの女と話すなど、ありえないことでした。けれどもイエスはそうされたのです！　イエスはこの女性に、ご自分がメシアであることを明かされます。それまで一度もなさらなかったことです。いのちの水について、また礼拝について、イエスは彼女とこれほど長く語り合われます。神学的なテーマについて、ほかのだれともこれほど長く話されたことはありません。時間をかけられます。彼女の心を勝ち取られます。ナザレから来たこの方、スカルの男にとって、彼女はそれだけの価値がある人だったのです。

神とのこの出会いによって、あらゆる恐れと恥から解き放たれた彼女は、村じゅうに福音を伝えます。多くの人が信じます。イエスと弟子たちは、さらに二日そこにとどまります。

後に、サマリアのこの信者たちは家の教会に集まるようになるでしょう。そして彼女、この女性は、きっとその集まりの中で、あの方、スカルの男について、自分のメシアについて、その方との比類のない出会いについて語ったことでしょう。礼拝について、あの方が自分に話してくださったことを伝えたでしょう。集められた教会こそ、父が礼拝される場所だからです。この女性もまた、必ずや教会の中で礼拝の声を上げたはずです。そうでなければ、なぜイエスは、ほかでもない彼女に、一人の女性に、礼拝のことを説き明かされたのでしょうか。

この物語一つだけで、沈黙の命令はばかげたものになってしまいます。

6.2 イエスの足もとで――マルタとマリア

よく知られた物語があります（ルカ10:38-42）。マルタが、イエスと弟子たちのために食事の支度をしているときに、妹のマリアが手伝ってくれないとイエスに苦情を言います。マリアは、弟子たちと一緒にイエスの足もとに座って、イエスから学ぶほうを選んだのです。イエスはマリアをかばい、それはむしろ必要なことであり、彼女は良いほうを選んだのだ、それが彼女から取り去られることはない、と言われます。これは何を意味しているのでしょうか。神の国では、女性も男性と同じように学ぶべきだということです。ラビの学校には、女性はほとんどいませんでした。イエスは違うやり方をなさいます。男性も女性も、等しく学ぶ力があり、等しく教える力があるのです。ここでもイエスは、当時の慣習を破られます。私たちのところではとうになくなった慣習です。後にパウロはテモテに書き送っています（テモテへの手紙第二2章2節）。多くの証人の前で聞いたことを、ほかの人にも教える力のある人々――女性と男性――にゆだねなさい、と。これはまさにこの場面にぴったり当てはまります。イエスは、ご自分の教えをそのような人々、女の弟子たちと男の弟子たちにゆだねられ、彼らはそれによって、後にほかの人々を教えることができるようになるのです。**これは明らかに、女性が教えることを一般的に禁じることと矛盾します。**

イエスとの関係においては、性別はもはや何の役割も果たしません。イエスは人を分け隔てされませんでした（マタイ22:16）。それは性別が中性化されるということではなく、どちらの性も同じように、区別なくイエスに重んじられるということです。**だれでも神のみこころを行う人、その人がわたしの兄弟、また姉妹なのです！**（マルコ3:33-35）

6.3 マグダラのマリア――使徒たちのための女性使徒

3世紀の教父、ローマのヒッポリュトス（Hippolyt von Rom）は、マグダラのマリアをこう呼んでいます。なぜでしょうか。復活の後、イエスが最初に出会われたのが彼女だったからです。もしかすると、彼女はほかのだれよりもイエスを愛していたのかもしれません。イエスは彼女を、悪霊につかれた奴隷状態と悲惨から解放されました。それ以来、彼女はイエスに従ってきました。イエスにいやされたほかの

女性たちと一緒にです（ルカ8:2-3）。イエスは彼女の心をご存じでした。そして、ただ彼女だけが、一人の女性が、園でのこの比類のない瞬間を経験することになりました。どうやらただ彼女だけが、人がこれまで聞いたあらゆることばにまさることばを、イエスから聞くことを許されたのです。

> わたしの兄弟たちのところに行って、彼らに伝えなさい。「わたしは、わたしの父であり、あなたがたの父である方、わたしの神であり、あなたがたの神である方のもとに上る」と（ヨハネ20:17）。

こうして彼女は遣わされた者、弟子たちへの女性使徒となります。正式なものではないにしても、彼女にふさわしい名誉ある呼び名です。このメッセージは、一人の男性にも、十二人のうちのだれかにもゆだねられませんでした。一人の女性に、忠実な女性の証人としてゆだねられたのです。**彼女もまた、集まりの中で、この出会いのことを何度も語ったのではないでしょうか。**

7 花嫁なる教会と女性たちの奉仕

信じる者はみな、イエスを告白する者はみな、男性も女性も同じように、ともに小羊の花嫁です。

創造の記事を見ると、アダムとエバが、神のみこころにかなって、互いに支配し合うのではなく、ともに、並んで、神の創造の命令を果たしていることは見誤りようがありません。一方が他方より優遇されることもなく、一方の性が制限されることもありません。神のご計画にかなう結婚とはこのようなものであり、基本的に、あらゆる生活の分野での両性の関わり方もこのようなものです。

堕落はこの姿を、深く、長く続くかたちで打ち砕きました。均衡は壊され、男性は今や――もちろん例外はありますが――女性を支配しようとします。罪によって初めて、女性は下に置かれるのです。そうです、屈服させられ、背景に押しやられます。公の場は男性のものとされます。一方、女性は女性で、自分の境遇の中で最善を尽くすための策を身につけていくでしょう。

では、教会においてはどうでしょうか。神の国においてはどうでしょうか。不平等と緊張と一方的な服従という罪深い型が、そこでも続けられるべきなのでしょうか。 パウロとペテロの手紙には、そう理解しようと思えばそう理解できることばがあります。しかし、まずパウロに目を向けてみましょう。

7.1 パウロと女性の同労者たち

二つ、あるいは三つの聖書箇所は、表面的に理解されると、パウロを**女性の敵**のように見せてしまいます。よく見れば、むしろその逆です。彼の絶対的な模範であるイエスと同じように、パウロも女性たちを革命的な仕方で、すなわち男性と同等の権利を持つ者として扱っています。彼は**女性の友**でした。実際、彼は区別をしません。主にある姉妹たちについて書くときの、あの当然のような書きぶりは目を引きます。疲れを知らない使徒であり宣教者であったパウロの働きのまわりには、いつも多くの女性たちがいて、網の目のように結びついていました。彼女たちは彼の宣教に組み込まれ、鎖の輪のように、欠かすことのできない同労者でした。女性たちは二列目の下働きではありませんでした。忠実さで際立ち、パウロと同じようにみ

ことばに仕えていたのです。そのような女性たちを数多く挙げることもできますが、私は三人にとどめます。ローマ人への手紙16章には29人の名前が挙がっており、そのうち少なくとも10人が女性です。パウロは彼女たちの奉仕と献身を、男性たちのそれ以上にたたえています。そこから始めましょう。

7.1.1 フィベ――女性執事、指導者、手紙の運び手

ローマ人への手紙16章のあいさつはフィベから始まります。それには十分な理由があります。パウロのおそらく最も重要な手紙をローマへ携えて行く信頼と資力を持っていたのは、彼女だったのです。手紙の運び手は、手紙を読み上げるだけでなく、それについての質問にも答えるのが普通でした。パウロはこの手紙をコリントで書きましたが、フィベは彼から直接教えを受け、この手紙の内容に導き入れられていたので、この務めを果たすことができました。彼女はローマのさまざまな家の教会を訪ね、手紙を読み上げ、質問が出たところでは説明したのです。

彼女自身、仕える者であり、コリントの東の港ケンクレアの家の教会の女性執事でした。それだけではありません。もしかすると、彼女はこの教会の指導者だったのかもしれません。ドイツ語訳によれば、パウロは彼女を支援者、助け、支え（Beistand, Hilfe oder Stütze）と呼んでいます。しかしこの語は本来上に立つ者という意味で（ギリシア語：prostatis）、たとえばこの家の教会での指導的な立場を指しています。ケンクレアの家の教会で責任ある立場にあったフィベにパウロがこの務めを託しながら、一方で女性たちが教会で話すこと、教えること、指導することを一般的に禁じている、とは考えにくいことです。

その一方で、私たちはこれらの節にあまり多くを読み込みたくはありません。しかし、彼女がただ単純な郵便配達の仕事をしたにすぎないかのように解釈するのも良くないことです。

7.1.2 模範的な夫婦――プリスカとアキラ

プリスカとアキラの夫婦は新約聖書で最もよく登場する夫婦で、パウロの宣教の働きを最も長く、最も近くで支えた同労者だったと思われます。当時は夫婦を紹介するとき、夫の名を先に出すのが決まりでした。ところが新約聖書は、この二人に六回触れるうち四回まで、妻プリスカを先にしています。理由は何でしょう。奉仕の場で前に立ち、導いていたのが彼女だったからです。夫より賜物が豊かだったとい

うこともあるでしょう。それでも二人は一つのチームとして、同じ価値、同じ立場で、心を合わせて働きました。どちらも、相手の得意なことも苦手なことも心得ていました。プリスカが女性であることには、宣教の上での意味もありました。女性に福音を届けたのは、多くの場合、男性ではなく女性だったからです。この二人は、プリスカが先に立って、アポロに教えました（使徒18:26）。パウロ本人から学び、何時間も一緒に天幕を作りながら、問い、答えることで鍛えられていたので、二人とも人を教える用意が整っていたのです。

ここで特に挙げなければならないのは、まさにプリスカ、一人の女性です。彼女の夫は彼女の背後で、二列目から彼女を支えていましたが、それによって階層が生まれることはありませんでした。彼女がまさにアポロを、そして確かにほかの多くの人々をも教えていたのに、パウロが女性に一般的な教えの禁止を命じたとは考えられません。この夫婦は、すべての夫婦の模範です。

7.1.3 ユニア――名高い女性使徒

パウロがたたえている宣教者の夫婦が、もう一組います。アンドロニコとユニアです。二人とも使徒と呼ばれています（ローマ16:7）。教父たちは新約聖書を最も早い時期に解釈した人々ですが、彼らはユニアのことを大いに敬って語っています。ヨハネス・クリュソストモス（Johannes Chrysostomos、紀元344-407年）の言葉はこうです。「使徒であるというだけでも偉大なことです。まして使徒たちの中で際立っているとは――それがどんなにすばらしい称賛であるか、思い巡らしてみなさい。使徒の名に値すると認められたこの女性の知恵は、いかばかりであったことでしょう。」

男性中心の教会の世界は、一人の女性が使徒パウロによって女性使徒と呼ばれていることを、なかなか受け入れられません。そのため、ユニアをユニアス（Junias）、つまり男性の名前にしてしまった翻訳もあるのです。あってはならないことは、ありえないことにされてしまうのです。しかし研究は今や繰り返し、これが女性の名前であることを確認しています。

二人がどのような意味で使徒だったのかは、はっきりしません。もしかすると、ある教会から派遣されたのかもしれません。あるいは、教会を開拓する使徒的な奉仕をしていたのかもしれません。それとも、復活された方を見た人々の一人として、

パレスチナの外で神の国のために働いていたという意味で使徒だったのかもしれません。

ここでも繰り返しますが、**女性が話すこと、教えること、指導することを禁じる命令は、女性使徒にとっては守りようがありません。** 二人が一時パウロとともに牢にいたことからは、二人ともおそらく公の場でも福音を宣べ伝えていたと結論づけることができます。

8 姉妹たちに沈黙の命令はあるのか

パウロのまわりにいたこの三人の女性や、ほかの女性たちを見るなら、集まった家の教会、すなわち今日私たちが礼拝と呼んでいるものの中で、女性たちが黙っていなければならないとは、だれも考えつかないでしょう。新約聖書のほかの箇所にも、そうあるべきだとか、そのように実践されていたという兆しはありません。**そのようなことがありうるという考えすら、私たちには浮かばないはずです。**

そのように理解せざるをえない短い一節を除いては。それはコリント人への手紙第一14章34-35節のこの本文です。

> 女は集会では黙っていなさい。彼女たちには語ることが許されていません。律法も言っているように、従いなさい。
>
> もし何かを学びたければ、家で自分の夫に尋ねなさい。集会で語ることは、女にとって恥ずかしいことなのです。

これは、主の直接の、明白な命令として理解することもできるでしょう。しかし、それには根拠のある疑いがあります。解放を求める考え方やフェミニズム的な考え方のゆえではなく、聖書そのものに根拠があるのです。

11章5節で、パウロは祈ったり預言したりする女性たちについて語っています（ヨエル書2章28節、使徒の働き2章17節と一致しています）。彼女たちはそれをどこでしているのでしょうか。ある人々は集会の中でと言い、別の人々は、14章のこの34-35節が裏づけているように見えるとおり、集会の外でだけだと言います。しかしパウロにおいて、祈ることと預言することは**とりわけ**集まりの中で行われるものです。彼は14章でそのように描いています。そこでは、女性たちが加わることは、パウロにとって当然のことなのです。 彼は何度もそのように言い表しています。

- 5節：私は、あなたがたがみな異言で語ることを願いますが、それ以上に、預言することを願います！
- 12節：あなたがた（みな）が集会を建て上げるために、あふれるほど豊かになるよう求めなさい。
- 23節：ですから、集会全体が一か所に集まって、みなが異言で語るなら……

- 26節：では、兄弟たち、どうしたらよいのでしょう。あなたがたが集まるときには、それぞれが賛美の歌を持ち、教えを持ち、啓示を持ち、異言を持ち、解き明かしを持っています。すべてのことを、建て上げるためにしなさい。

ここで兄弟たち（ギリシア語：adelphoi）と言われているのは、きょうだい、つまり兄弟**と**姉妹のことです。ほかの多くの節と同じで、男性だけに限ることはできません（この語はコリント人への手紙第一に27回出てきますが、ほとんどいつも兄弟**と**姉妹を指しています）。

- 31節：あなたがたはみな、一人ずつ順番に預言することができるのです。すべての人が学び、すべての人が慰めを受けるためです。

聖書を神のことばとするすべてのキリスト者にとって、聖書本文の中の矛盾はありえないことです。ところが34-35節は、ほとんどの読者にとって、本文の中の異物のように見えます。これはまず、聖書批評や間違った心構えとは関係がありません。健全な常識と関係があるのです。常識は、ここに矛盾があることを正しく感じ取っています。

この矛盾をどのように解けばよいでしょうか。女性が祈り、預言し、また全員がそうするように促されているこれらの節を見るなら、さらにパウロが描いている女性たちの奉仕を見るなら、普遍的で時代を超えた沈黙の命令が意図されていることはありえません。 言い換えれば、この本文には別の説明が必要なのです。矛盾した意味ではなく、納得のいく意味をもたらす説明です。非常に多くの解釈、いやむしろ説明の試みがあります。たいていの解釈者が、この矛盾に気づいているからです。ここではそのうちのいくつかを挙げ、その後で別の解決を提案します。

8.1 預言の吟味

コリントの女性たちが家で夫に尋ねるべきだというのなら、それは彼女たちが疑問を抱えており、おそらく十分に教えを受けていなかったことを意味します。知識が欠けていたのです。そのため彼女たちは、教会の集まりで口をはさんで質問しすぎたか、あるいは賢明でない発言をしたのでしょう。しかもその仕方は、パウロがここで従うと呼んでいることの正反対でした。こうして彼女たちは集まりを乱し、平和の神にふさわしくない混乱が生じたのです。つまり問題は、彼女たちが何かを言

うかどうかではなく、どのように、また何を言ったかだったということになります。

また、こういう意味かもしれません。女性たちは、夫の、あるいはすべての男性の預言を吟味すること（29節）から外されていた、ということです。当時の文化では、妻が人前で批判して夫に恥をかかせることは、恥ずべきことだったからです。

8.2 34節と35節は引用か

パウロはここで、コリントの人々のことばを引用して、それに反論しているのかもしれません。そうであれば、これはパウロのことばではないことになります。パウロがコリント人への手紙第一の中で、自由に、あるいは文字どおりに、ある手紙から何度か引用していることは、広く認められています。次の箇所です。6章12-13節、7章1節、8章1節と4節、10章23節、15章12節。引用が毎回それとして示されているわけではなく、引用かどうかは文脈から判断されます。パウロは、口頭で、あるいは手紙によって、コリントに女性へのそのような沈黙の命令を求める男性たちがいることを知らされていたのです。当時のギリシア人やローマ人の文化には、そのように女性に沈黙を求める要求がありました。

律法を持ち出しているのは奇妙です。モーセの律法には、沈黙の命令も、服従の命令もないからです。旧約聖書のどこにも、女性の服従と沈黙についての記述は見当たりません。創造の物語にもありません。 ほかでもないパウロこそ、モーセの律法がキリスト者にとってもはや生活の規範ではなく、まして礼拝のあり方を決めるものではないことを、はっきりと示しています。ですからここで言われているのは、そうした人々が持ち出していたユダヤ的な、あるいはギリシア的、ローマ的な解釈や規則であって、神の律法でも、キリストの律法でもないのかもしれません。このことは、ここに引用があるという見方を支持します。

もしこれが引用であるなら、パウロは36節で、この受け入れがたい要求にはっきりと、ほとんど憤慨して応じていることになります。ドイツ語や聖書の翻訳では、そのことは見えてきません。パウロの反応は、こう言い表すことができるでしょう。「何だって？」あるいは「ばかな！」あるいは「とんでもない」、女性たちが集会で黙っていなければならないなどと。それは、パウロによる強い割り込みであり、反論であることになります。

8.3 34節と35節は後からの挿入か

これらの節は異質に響き、パウロのほかの箇所には見られない内容を含んでいます。今では古い写本から、これらの節が写字生による挿入であることを示すはっきりとした手がかりが得られています。

もし内的な疑い、つまり矛盾した言い方や理解しにくい言い方だけしかないのなら、私たちはまだ解明を待たなければならないでしょう。しかし今や、それを裏づけるように見える写本上の証拠があるのです。

最初の根拠のある疑いは、この二つの節が、写本によって何度も異なる位置に置かれているという事実から生まれます。一つは、私たちのところで普通置かれている位置、つまり33節の後です。**しかしほかの写本では、40節の後に置かれているのです。** 最も簡単な説明はこうです。だれかがある写本の余白にそれを書き込んだ。次の写字生がこの欄外の書き込みを本文の中に移し、その際にどこに置くかを自分で決めた。もしそれが毎回同じ位置だったなら、だれも気づかなかったでしょう。

この最初の疑いは、4世紀の重要な**バチカン写本（Codex Vaticanus）**における発見によって確かめられます。新約聖書にとって最も重要な大写本の一つです。この写本では、実際にこれらの節やほかのいくつかの節が、後からの挿入として印をつけられているのです。

6世紀のフルダ写本（Codex Fuldensis）にも両方の読みがあり、34節と35節を**含まない**ほうが訂正として理解されています。

つまり、両方の写本（手書きの写本）のもとになった本には、どちらにもこれらの節がなかったのです！

そうであれば、これらの節はパウロから出たものでもありません。パウロが書いたものでないなら、霊感によるものでもなく、端的に誤りです。良い種の中に蒔かれ、今日まで育っている悪い種のようなものです。この二つの節がもたらした影響、それが女性たちに何を引き起こしてきたか、どれほどの涙と争いと分裂をもたらしてきたかを考えるなら、この説の疑いには十分にうなずけます。

これらの節がなくなると、コリント人への手紙第一14章の最後の段落は再び筋が通り、明快な思考の流れが生まれます。

沈黙の命令を文字どおりに真剣に受け取る女性たちは、ともに賛美を歌うこと（14:15）も、「アーメン」と言うこと（14:16）もできないはずです。しかし沈黙の命令がそのように理解されているところでも、彼女たちはそうしています。これは一貫しておらず、この解釈に従うなら、パウロ自身でさえ自分と矛盾することになってしまうことを示しています。ユダヤ人の会堂ではそうだったかもしれません。しかし、よみがえられた方の集会ではそうではありませんでした。

私は悲しく思います。男性たちがパウロのこのことばを使い、この章の、この手紙の、そして新約聖書全体の文脈を顧みずに、女性たちに不利なこの解釈を選び、それによってすべての女性に沈黙を課してきたことを。そうすることで、彼らは集まりから多くの霊的な豊かさを、いや主の声さえも奪っているのです。姉妹たちもまた、神の御霊と御霊の賜物を持っているのですから。最も大切な集まりの中で、キリストのからだの半分が黙っていなければならないということがありうるでしょうか。あるいは、御霊は男性を通してしか働かれないのでしょうか。

私は、いつも聖書を聖書と比べ、ある解釈を支え、裏づける並行箇所を探すように学んできました。女性への沈黙の命令を含み、間接的に前提とし、あるいは命じているほかの本文はあるでしょうか。ありません。

全体として見れば、女性たちが加わっていることを直接、あるいは間接に示し、推測させることばがあるだけです。沈黙の命令は、ただ一つの本文にすぎません。しかも普通ではない本文です。ですから、それは不適切であるために禁じられた語り方を指しているか、あるいはパウロから出たものではなく、許されない挿入か引用であるかのどちらかです。その場合、それは使徒の指示ではなく、まさにその正反対ということになります。

これほど乏しい証拠しかないのに、どうして姉妹たちに不利な決定を下し、キリスト者の最も大切な集まりで、生涯にわたって彼女たちに発言を禁じることになるのでしょうか。そしてこのテーマに触れられると、どうしてひどく感情的になり、いきり立つのでしょうか。それを主張する男性たちに、どうか一度、彼女たちの立場に身を置いてみていただけないかと、心からお願いしてもよいでしょうか。つまり、これほど広い影響を持ち、厳格で、しかも説明のつかない、さらには矛盾さえした指示を、たった二つの文から、主の命令として受け入れるということをです。主の命令は理解できるものであって、異質でいかがわしいものではありません。それは人を建て上げ、私たちの益となるためのものであって、一方の性をおとしめるためのものではないのです。

私はこう問わざるをえません。**エバの娘たちが黙り、口を開くことを禁じられることに、最も大きな関心を持っているのはだれでしょうか。それは、園ですでに女性を攻撃したあの古い蛇です。しかし神は女性の側に立たれます。彼女の子孫が蛇の頭を踏み砕くのです。**

礼拝で、ことばや歌の奉仕によって、説教や証しによって姉妹たちが加わることを支持する人々は、ときにフェミニズムだ、世俗的だと非難されます。それに対して私はこう答えなければなりません。この二つの節が、女性を公の場から締め出し、それによって差別しようとする世俗の法を映し出しているのだとしたら――その可能性は非常に高いのですが――この問題で世俗的なのはいったいだれなのでしょうか。

女性たちが今日もなお、1世紀か2世紀の世俗の命令のゆえに集会で黙っているのだとしたら、しかもその命令が欺きによって聖書の中に入り込んだのだとしたら、それは悲劇的なスキャンダルです！

9 姉妹たちに教えることの禁止はあるのか

パウロとイエスが女性たちにどう接したかを考えれば、女性は教えてはならないなどという考えは浮かばないでしょう。女性たちは、礼拝の中で教えを語ることのできる人々に属しています（コリント第一14:26）。プリスカがアポロを教えたように教える人々（使徒18:26）、また良いことを教える者であるべき人々（テトス2:3）にも属しています。彼女たちも男性と同じように、学んだことをさらにほかの人に教えて伝えていく人々に属しているのです（テモテ第二2:2）。教えるという霊の賜物も、男性に限られてはいません（ローマ12:7）。

イエスは、女性が男性と同じように教えることを望んでおられます。（マタイ28:19-20）ですから、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。父、子、聖霊の名において彼らにバプテスマを授け、**わたしがあなたがたに命じておいた、すべてのことを守るように教えなさい。**

しかし、発言の禁止の場合と同じように、女性は教えてはならず、指導したり権威をふるったりしてもならないと、まさにそのように理解されている聖書のことばは、**たった一つ**しかありません。これらの節が礼拝だけについて言っているのか、それとも生活のあらゆる分野を含んでいるのかについては、意見が分かれています。この点では、礼拝での沈黙の命令があれば、ほとんどのことは片づいていたでしょう。話してはならない人は、そこで教えることもできないからです。

テモテへの手紙第一の問題の箇所は、エペソでの歴史的な、問題をはらんだ状況にかかわっています。その状況を私たちは正確には知りません。私たちの手元にあるのはこの手紙だけ、つまり事の一方の側だけです。知らないことや本文が黙っていることから結論を引き出し、それをあらゆる時代に拘束力のある命令として示す前に、このことに配慮すべきです。その意味で、この手紙は私たちに宛てて書かれたのではなく、私たちのために書かれたのです。一方、受取人たちは、自分たちの状況の中ですべてを理解していました。本来なら8-15節の段落全体を取り上げるべきですが、ここでは11-14節に限ります。この章の終わりに、段落全体の意訳を載せます。

[テモテへの手紙第一2:11-14] 女は静けさのうちに、全き服従をもって学びなさい。私は、女が教えることも、男の上に立って支配することも許しません。む

> しろ静かにしていなさい。アダムが先に形造られ、その後でエバが造られたからです。またアダムはだまされず、女がだまされて違反に陥ったのです。

女が学ぶべきだというこの一文は、この段落の中で唯一の命令形であり、しかも革命的です。ほとんどの女性にとって、教育は手の届かないものであり、また望まれてもいませんでした。ここに、これらの指示を理解する鍵があります。この女――ここで言われているのは、特定の一人の女性（「一人の」女）か、女性たちのある一群でしかありえません――は、受け入れる心をもって学ぶべきなのです。生半可な知識や、テモテへの手紙第一で何度も触れられている誤った教えを持ったまま、横柄な態度で教えたり、自分の夫に教えてやろうとしたりしないためです。

「支配する」という語は、ここでは霊的な指導も、教える権威も意味していません。 このギリシア語は新約聖書にただ一度しか出てこず、当時の日常の言葉では否定的な意味を持っていました。パウロが権能や権威を表すのに用いる語は、ほかにあります。ですから、テモテへの手紙の中でこの語が描いているのは、度を越えた振る舞い、否定的で、脅かすような、さらには相手の領分を踏みにじるような振る舞いです。男性に対しても、パウロは同じことを禁じたでしょう。しかしここでは、具体的に女性の問題だったのです。**教えることと支配すること**は、望ましい組み合わせではなく、誤った組み合わせです。それが何を意味しうるのかさえ、私たちには正確には分かりません。取り上げられている問題が正確に何だったのかは、これらのことばから再構成を試みるほかないからです。**教える権威は、健全な教えを教えることから、教える賜物から、そして教会とその指導者たちの同意と支持から生まれるのです。**

もっと正確に訳すと、こうなります。私は今は、女に……を許していません。 つまりこの本文は、ある地域の状況を取り上げているのであり、その状況は、その女性が自分の宿題を済ませれば、良い方向に変わりうるものでした。まさにこうした是正を促すことこそ、この手紙全体の目的です。この手紙は、何人もの具体的な人物と誤った教えに触れています（テモテ第一1:3-6、1:19-20、4:1-10、5:13-16、6:3-10、6:20-21）。

パウロはここで、アダムとエバの物語を短く引き合いに出します。比較として、また例としてです。アダムの優位を描くためではありません。また、エバの、ひいてはすべての女性の弱さや誘惑されやすさを、教えることを禁じる理由とするためでもありません。アダムが先に造られたという事実は、彼の指導的役割を、そしてそれによって堕落前の創造の秩序を根拠づけるものではありません。パウロは単に実

際の順序を述べているのです。言い換えれば、パウロは、アダムが先に造られたから女性は教えてはならない、とは言っていないのです。「なぜなら」という小さな語は、原文ではときに、しかし常にではなく、理由の始まりを示します。ほかの箇所と同じように、旧約聖書からの比較やたとえの始まりにすぎないこともあるのです。

この文脈でパウロがなぜアダムとエバを持ち出すのか、正確に知っていたのは受取人たちだけでした。私たちは次のような説明が可能であり、うなずけるものだと考えますが、そこから広い範囲に及ぶ結論を引き出すことはしません。

エペソに出回っていたグノーシス的な教えの中では、聖書の創造の物語が異教的な要素、特にグノーシス（6:20）と混ぜ合わされていました。それらはエバを、最初の者として、またアダムの中にたましいを吹き込んだ女性的な力として持ち上げました。もしかすると、順序を強調したこの言及は、その是正として役立ったのかもしれません。エペソの町の生活を支配していたアルテミス崇拝も、それに伴う神話や教えや慣習とともに、何らかの役割を果たしていたでしょう。教会にとって、それは脅威でした。ここでは触れられていませんが、使徒の働き19章を読むと、生き生きとした印象を得ることができます。パウロはその危険をよく知っていました。彼は十分長くエペソにいたのです。

エバは、アダムの後に造られただけでなく、アダムから、アダムのために造られました。すべてを彼と分かち合う、助けとなる対等なパートナーとなるためです。 蛇が近づいてきたとき、彼女はだまされました。どうやらこの状況に一人で立ち向かおうとしたからです。この存亡にかかわる危険の中で、彼女は自分のパートナーに向き直り、ともにこの試練に立ち向かおうとはしませんでした。ですからエペソの女性たちも、そして結局はすべての女性たちも、自分のパートナーを差し置いて事を進めるのではなく、彼らとともに行動し、必要なら彼らから学ぶべきなのです。

アダムは、エバがいる前に、禁じられた実についての戒めを受けました。その意味で、エバはそれを夫から聞かなければなりませんでした。エバが欺かれたのは、ひょっとすると、よく聞いていなかったからかもしれません。それは、エペソの何人かの女性たちへの警告でした。学びなさい、福音と私たちの主イエス・キリストの教えにしっかりと根を下ろしなさい、と。**そうして初めて、彼女たちは教えることができるのです。男性たちをも。** アダムはだまされませんでした。彼は戒めを神から直接、じかに聞いて知っており、十分に知ったうえで罪を犯しました。創世記で

見たように、彼の罪は惑わされたことではなく、目を開いたまま、つまり十分に知り、同意したうえで罪を犯したことでした。

パウロの手紙が誤った教えと戦うことを目指しているのなら（1:3以下）、なぜ人々は2章12節を、女性が正しい教えを教えることの禁止として読み、女性が誤った教えを教えることの禁止として読まないのでしょうか。

不適切な仕方で誤ったことを教えることが、エペソの一人の、あるいは何人かの女性の具体的な問題でした。しかし、男性もまさにそのようなことをしてはならないのは明らかです。真理を学んだ人はみな、仕える姿勢でほかの人を教えるべきなのです。

次に、テモテへの手紙第一2章8-15節の説明的な意訳を載せます。この難しい本文を、私なら手短にこう言い表すでしょう。

愛するテモテ。エペソでは何人かの男たちと何人かの女たちが、誤った教えを持ち込んで問題を起こしています。これをきちんと収めるには、次のことが必要です。まず男たちが祈り始めることです。顔を合わせるところなら、どこででも祈ることです。人前でも祈ることです。神話や誤った教えをめぐって言い争うのをやめることです。怒りと口論は祈りを妨げます。ともに祈れば、穏やかで平和な暮らしと交わりが生まれます。争いと暴力に汚れていない、上げられた、開かれた、受け取る手で、男たちはともに私たちの救い主である神を礼拝し、神の御座の前ですべての人のためにとりなしをすべきです。

もちろん、女たちも祈るべきです。男たちとまったく同じように。そこで大事なのは、女たち――特に念頭にあるのはお金持ちの女たちです――が、どこに姿を見せるときも、人目につくときも、控えめであることです。彼女たちの身の飾りは、男の目も女の目も自分に集め、互いに競い合うためのものになっています。けれどもそれは、凝りに凝った目立つ髪の結い方や、金の装身具、真珠、値の張る奇抜な服であってはなりません。メシアに従う女は、そんなふうに自分を舞台に立たせる必要も、そういうやり方で影響力を持とうとしたり人の上に立とうとしたりする必要もないのです。それよりずっと値打ちのある飾り、ずっと値打ちのある影響力があります。それはすべての人から重んじられるもの、良い行いです。

女は、福音の真理が何であるかを学ぶべきです。学ぶ気持ちを持ち、よく注意を払い、知りたいと願いながら。自分の家で。特にこうした女たちの何人かには、あの誤った作り話や教えをこれ以上広めることを、今は許しません。夫より上に出て、

我が物顔に夫を押さえつけたり、夫に教えを垂れたりしてはなりません。夫や教会の男たちが健全な教えを説き明かすときには、よく聞くべきです。彼女たちにはそれが必要です。知識が足りないのです。そして家から家へと作り話を広めるとき、その無知は大きな害を生むのです。

そのよい例が、アダムとエバの創造です。先に造られたのはアダムで、エバに教えるはずだったのも彼でした。彼は欺かれませんでした。ところがエバは欺かれ、惑わされました。誘惑を受けたとき、彼女は自分のパートナーのほうを向きませんでした。女たちが素直に学ぼうとしなければ、エバと同じように欺かれ、人を陥れるわなになってしまいます。エペソのある女たちが自分の夫から学ばなければ、まったく同じことが起こるでしょう。学び終えてはじめて、彼女たちはほかの人を、男たちをも教えてよいのです。

そして、この女たちに知ってほしいのです。彼女たちは子を産むことを通して守られます。エバが惑わされたにもかかわらず、出産に大きな危険が伴うにもかかわらず。救ってくださるのは、私たちの救い主である神だけであって、人の造ったエペソの守り女神アルテミスではありません。ですから彼女たちが心を注ぐべきなのは、信仰と愛と聖さです。夫婦が、アダムとエバのように一つの肉として、そろってそうするのです。女たちは子を産むことを恐れなくてよいのです。だれも彼女たちに結婚を禁じてはなりません。男たちは性において自分を制し、妊娠が多すぎることが妻にとって危険であることを考えるべきです。

10 万人祭司

楽園の園で、堕落の前の無垢の状態にあったアダムとエバは、治める王であり、神の御前に生きる祭司でした。神とともに、神のために生きていたのです。耕すことと守ることは、後に祭司の奉仕に用いられるようになった言葉です（創世記2:15）。

エデンの楽園の園は、神殿の至聖所を映し出す像です。もっと良い新しいエデン、すなわち新しい地は、世界全体を包む一つの至聖所になります。地のどこもかしこもが楽園となるのです。ですから、新しい創造を表す新しいエルサレムは、とてつもなく大きな立方体の形で描かれています（黙示録21章）。神殿の至聖所も、同じ形をしていました。その新しい地に住むのは、女も男も、王も女王も、祭司も女性祭司もです。

そこでは、男性と女性の関係に階層があるのでしょうか。ある人々は、ないと考えます。それは新しい創造だからです。階層は古い、堕落した創造にだけ当てはまるというのです。けれども教会の中では、新しい創造はすでに始まっています。そこでは、この未来が今すでに、互いの振る舞いの中に見えるようになっています。それなら、なぜ教会の中に、神が望まれない階層がいまだにあるべきなのでしょうか。**イエスの教会で意味を持つのは、ただ互いに、自発的に従うことだけです。**

宗教改革は、万人祭司というこの真理を改めて光の下に取り出しました。けれども教会の現場には、それがほとんど、あるいはまったく表れてきませんでした。信者がみな祭司であることを疑う人はいません。カトリック教会でさえそうです。問われているのは、この真理が教会の暮らしの中で具体的に何を意味するのか、ということです。信じる人は女も男も、一人残らず祭司です。本来ならそれだけで、礼拝の中で両方の性が同じ役割や奉仕を担ってよい理由として足りるはずです。現実はそこから遠く離れています。万人祭司は、まず一人ひとりの生活の中で生きられています。祈ることも、神と交わることも、個人に与えられた祝福です。けれども祭司という務めと、それに伴ういけにえの奉仕の手本は旧約聖書にあります。そこで祭司は礼拝を取り仕切り、いけにえをささげていました。**ですから万人祭司と聞けば、信じる者たちが集まる場を思い浮かべるのが自然です。彼らは礼拝者として、そろって天の聖所に入っていくのです。** そして、霊の祭壇である主の食卓に一緒に着き、賛美という霊のいけにえをささげます。そこに男女による違いを設けること

ができるでしょうか。設けてよいのでしょうか。**新しい契約のもとで、神のことばはそのような区別をしていません。だとすれば、私たちも区別すべきではありません。**

古い契約では、男性だけが祭司でした。しかし、だれでも祭司やレビ人になれたわけではありません。レビ人として生まれなければならず、祭司になるにはアロンの家系の出でなければなりませんでした。さらに、儀式上きよく、体に欠陥がないことも必要でした。

ついでに言えば、祭司の仕事は肉屋の仕事と同じように、荒々しく骨の折れるものでした。中東の暑さの中で動物を解体するのは汗だくの仕事であり、平均して女性より力の強い男性がするほうがよかったのです。このような礼拝のための祭司の仕事は、今日ではもうありません。

また、特別な（男性の）レビ的祭司職が生まれたこと自体が、イスラエルの失敗のしるしであることにも注意すべきです。それは、民が金の子牛によって偶像礼拝に誘い込まれた後で初めて生まれたものであり（出エジプト記32章）、それに立ち向かったのはレビ人だけでした（26-29節）。**神がご自分の民に最初に意図されたのは、彼らがみな「祭司の王国」となることでした（出エジプト19:6）。この幻は今、キリストにあって、キリストを通して実現しています（黙示録1:6、ヘブル13:15）。神の目的は達せられました。女性も男性も、今や神の祭司なのです。**

私たちの人生は、男性の人生だけでなく、男性と女性の人生は、神へのささげ物として生きたいけにえであるべきです。人生全体が祭司としての奉仕なのです（ローマ12:1-2）。

11 姉妹たちは女性長老になってよいのか

姉妹たちに対する一般的な沈黙の命令も、一般的な教えの禁止もないのなら、彼女たちは女性長老になってよいのでしょうか。

公式の長老がいて、教会員のだれもが、だれが長老であるかを知っている教会もあります。長老の奉仕についてだけ語る教会もありますが、その働きの中身――教えること、群れを守り導くこと、世話をすること、監督すること、牧会的な配慮をすること――について言えば、基本的に違いはありません。

人はだれでも、完全に孤立して生きていないかぎり、その時代の子です。時代は変わります。ときには良い方向へ。何を言いたいのかというと、新約聖書の手紙は、家父長制が社会の基本的な秩序であった時代に書かれたということです。女性は男性より能力が劣り、価値も低いと考えられていたので、公の場には姿を見せませんでした。女性には投票権がありませんでした。小さな形であれ大きな形であれ、まさにこの差別こそ、堕落によって生じたものなのです。

私たちは、**イエスとパウロが時代精神に合わせたのではなく、神のかたちを担う者として女性が持っている尊厳を女性に与えたこと**を見てきました。それでも使徒たちとその同労者たちは、私たちが知るかぎり、おそらく男性の長老だけを立てたのでしょう。それはまったく理解できることです。**彼らは、すでにあるものから始めなければなりませんでした。人々がいてほしいと願う場所からではなく、人々がその文化の中で実際に生きている場所から始めなければならなかったのです。** しかしそれは、いつまでもそのままでなければならない、そのままであるべきだ、ということを意味しません。コリントのフィベ（ローマ16:1）は、すでにパウロの時代に可能であった一つの例外にすぎません。指導することは、それ自体として男性の仕事ではありません。女性のほうがより良いリーダーであることを示す大規模な研究さえあります。私にはそれを判断することはできませんが、基本的に、女性には精神的な、あるいは知的な制約などまったくないことをはっきりさせています。

では、新約聖書は何と言っているでしょうか。この問いについて、テモテへの手紙第一3章1節に重要な手がかりがあります。ほとんど気づかれていない手がかりです。

> このことばは確かです。もしだれかが監督の職に就きたいと思うなら、それはすばらしい働きを求めることです。

この節は、一人の女性の誤った教えと支配について述べていた段落のすぐ後に続いています。**この節は新しい段落を始めているのではなく、2章8-15節を締めくくっているのです。** 段落も節番号も見出しも、もともとの文書にはありませんでした。3章1節は、2章11-15節の女性、あるいは女性たちを指しているのです。 本文は、もし男がそのような奉仕を求めるなら、とは言っていません。もし一人の女性が、あるいは女性たちがそのような奉仕を求めるなら、と言うこともできるのです。**「だれか」という語は中立であり、男性でも女性でもありません。**

パウロは、女性たちがほかの人を教える前に、まず自分で学ぶことを望みました。そして学んだ後も、教える資格を横柄に奪い取らないことを望みました。そうすれば彼女たちは、この監督の、あるいは長老の奉仕に就くことも、それに召されることもできたのです。必要な成熟と力量があれば、この奉仕は彼女たちに開かれていました（男性がいない場合だけではありません）。パウロはここで女性たちのために扉を開いているのであり、そのような女性たちを、彼はとうに自分の同労者として知っていたのです。

続いて、必要な資格が挙げられます。そこから、もちろん男性もこの奉仕を担うべきであることが分かります。男性は一人の妻だけを持つべきです。長老になりたいと願う女性にも、同じことが当てはまりました。**代名詞は、列挙の初めから中立なのです。「一人の妻の夫」というのは、当時、結婚における忠実さ、つまり一夫一婦制を表す言い回しであって、男性だけが長老になってよいという要求ではありませんでした。**

当時は、男性が pater familias（家長）として家を治めていました。それをよく行うことは資格の一つでしたが、それは女性にも同じように当てはまりえました（テモテ第一5:14――家を治める）。パウロは手紙の中で、これらの特質のすべてを女性にも求めています。これらの資格も、監督の奉仕そのものも、男性だけの事柄ではありません。

女性もまた、このすばらしい働きを求めてよいのです！

執事の奉仕については、議論はもっと少なくなっています。11節は、女性も女性執事となるべきことを示しています。

女性を教会の指導から締め出すことは、自分自身を傷つけることです（エペソ5:29）。残念ながら、指導者の集まりや「兄弟会議」から姉妹たちを締め出してきたことは、しばしば資格の乏しい、あるいは資格のない男性たちが教会の指導に就くことにもつながりました。それによって生じた害については、ここで述べるまでもないでしょう。

聖霊は、男性にも女性にも、指導し、上に立つ賜物を与えてくださいます（コリント第一12:28、ローマ12:8）。そのような女性たちに目を留め、彼女たちを育て、そのような奉仕に招くことを始めましょう。最初の簡単な一歩は、男性指導者の妻たちも一緒に指導者会議を開くことでしょう。

ペテロとパウロが、教会の指導は男性だけに限られていると考えていたのなら、なぜ指導の賜物についての彼らの教えは、その制限をはっきりさせないまま、男性にも女性にも向けられているのでしょうか。霊の賜物についての教えは、新しい契約においては、教会の指導に関して男性と女性の間に違いがないことを示しています。

イエスが十二人を、ご自分の新しい運動の創設の使徒として選ばれたことも、これと矛盾しません。確かに、彼らはみなユダヤ人であり、自由人であり、男性でした。**しかしイエスが彼らを任命されたのは、移行の時代、新しい契約が始まる前のことでした。十二人の族長に倣って、彼らはイエスに従う者としての神の民の回復を象徴していたのです。**

ペンテコステの後、御霊の時代には、後に続く教会の指導者たちが異邦人や奴隷でもありえたことに、異論はありません。十二人がユダヤ人で自由人であったことは、そのような指導者に反対する論拠にはなりません。同じように、十二使徒が男性であったことも、後の指導者が女性でありうることに反対する論拠にはなりません。

もし使徒たちにとって、女性は指導の奉仕にかかわるべきではないということが大切だったのなら、彼らはそう言ったはずです。しかし、女性を締め出すことは、どこにもほのめかされてさえいません。

最後に、これはすべてを一律にすること、男性と女性の創造における違いをなくすことだ、という反論について。私はこれにはっきりと異を唱えます。アダムのかたわらに置かれたのは二人目のアダムではなく、一人のエバだったからです。彼女は

彼にないものを持っています。二人は合わせて、互いを補い合います。階層的な、あるいは地位による上下はありません。

男性と女性の違いは、見誤りようがなく、見過ごしようもありません。「平等主義の」（egalitär）という言葉、つまり男性と女性が同じであるという意味の言葉は、この議論ではあまり役に立ちません。ここで問題なのは、男性であることを女性であることと分けるもの、またその逆ではなく、聖書的でない序列の違いを退けることです。その序列の違いによって、教会における女性の働きが狭められ、妨げられさえするのです。**女性の働きを狭めることは、結局は聖霊に逆らうことなのです。**

12 かぶり物——今もなお？

いわゆるかぶり物は、新約聖書ではコリント人への手紙第一11章2-16節にしか出てきません。明らかに、それはコリントで論争の的となっていたテーマでした。ここでも私たちは、手紙の受取人たちのところにあった背景を知りません。コリントの人々は、パウロがそれについて書いた一文一文を理解したことでしょう。私の説明の試みは、多くの試みの一つにすぎません。私たちにとって、これは難しい本文であり続けます。それを確かめるために、愛する姉妹よ、もしあなたがかぶり物をしているなら、その理由をこの段落から一度自分ではっきりさせてみてくださるようお願いします。**なぜ、どこで、いつ、あなたはかぶり物をするのでしょうか（もしそれがあなたに当てはまるなら）。**

ここで扱いたいのは、私たちに宛ててではなく私たちのために書かれたこのパウロの本文を適用し、次の問いに答えることです。それは今日も拘束力を持つのか。もし持つなら、どのように持つのか。

この段落は、しばしば次のように説明されます。男性、あるいは夫は女性のかしらであり、創造に基づく指導的役割を持っている。女性、あるいは妻は、人前で祈ったり預言したりするときに、頭に何かをかぶること、すなわちかぶり物（今日で言えば、スカーフ、帽子、ベールなど）によって、そのことを表す、と。覆うための衣服としてどんなものが考えられているのかは、はっきりしません。おそらく、必要なときに上着の長い端を頭の周りや上にかけたのでしょう。

最初の問いは、どこで覆いが求められているのかということです。礼拝の中でか、外でか。問題は、姉妹たちが**どこで**祈り、預言するのかということです。前の章（8章）で私は、それは礼拝、つまり男性と女性がともに祈り、預言する場所にかかわるものに違いないと述べました。

普通は、パウロが女性たちにかぶり物をするよう促しているのは、彼女たち、あるいはその一部がもうかぶりたくないと思っていたからだと考えられています。そうかもしれません。私は10節に基づいて、むしろ逆に見たいと思います。**女性たちにかぶり物を取るよう求める男性たちがいたのです。** 新しいキリスト者の自由としてか、あるいは不道徳な動機から、つまり教会の女性たちとその髪を、ほかの場ではまったく、あるいはほとんど見ることのできないような仕方で見たいという動機

からです。**だからこそパウロは女性たちを励まし、すべての女性に、かぶり物をしてよい権利を認めているのです（10節）。**とはいえ、だれが何を求めていたのかというこの問いに、必ずしも答える必要はありません。

そのためには、当時のギリシアのコリントとローマ帝国において、かぶり物がどのような役割を持っていたかを知っておくべきです。既婚の女性は、礼拝の中だけでなく、人前ではいつもかぶり物をしていました。それは、ほかの男性の自由にはならない既婚女性としての尊厳に属していました。かぶり物をしなかった娼婦や女奴隷とは違うのです。女奴隷にはかぶり物が禁じられていました。かぶり物は、おそらくベールのような上掛けで、一方では身を守るものであり、他方では夫への忠実さのしるしでした。このかぶり物によって表されていたのは、社会的な尊厳だったのです。**かぶり物に関しては、服従という問題は関係がありませんでした。この古代の文化では、女性はいずれにせよ従っていたのです。かぶり物は服従のしるしではなく、帰属、すなわち夫に属していることのしるしでした。服従はこのコリント書の本文のテーマではありません。**コリントで、また当時ほとんどどこででも良い社会的な習慣であったことは、今日もイスラム諸国ではそうですが、私たち西洋ではもはやそうではありません。かぶり物のような象徴は、社会とその文化がその意味を知っているところでしか意味を持ちません。

パウロは10節で、かぶり物のテーマに決着をつけるために、はっきりとした言明をしています——**注意してください。原文には、権威や力のしるしを頭に持つということは何も書かれていません**（つまりかぶり物のことです）。正しく訳すと、こうなります。

ですから、女は御使いたちのために、自分の頭に対して権威を持つべきです。

この節は、もはやかぶり物は必要ないという要求が持ち出されていたのかもしれないことを示しています。パウロは今こう言っているからです。女性は、かぶり物をするかどうかを自分で決めてよいのです。しかも教会のすべての女性がです。信仰に入った未婚の女性、解放された女奴隷、女奴隷、娼婦たちもです。パウロはすべての女性に、教会で、礼拝の中で、かぶり物をする尊厳を与えています。いつの日か御使いたちをさばく者とされている人（コリント第一6:3）は、この事柄を必ず自分で決めてよいのです。

これによってパウロは、21世紀にこの本文を読むときに私たちが抱く問いにも答えています。かぶり物をすることが自分にふさわしいかどうかは、一人ひとりの女性

が自分で決めるのです。夫でも、教会の指導者の男性たちでもありません。今日、礼拝でのかぶり物は、外部の人々にはむしろ戸惑いを引き起こします。それは、コリントでかぶり物がもたらしたこととまさに正反対です。今日のかぶり物は、文字どおりの意味で時代遅れなのです。

文化や時代に合わせた調整とは違って、この本文から時代を超えて残るのは次のことです。

- **かしらという語は、首長、指導者、だれかの上に立つ権威という意味ではなく、起源、源という意味です。**
- キリストはかしらとして、男性の尊い起源です（その創造者として）。男性（アダム）はかしらとして、女性（エバ）の尊い起源です。そして神はかしらとして、キリストの尊い起源です（その受肉において）。
- **男性と女性は 礼拝の中で祈り、預言的に語ります。**
- だれもが、自分の存在の源であり起源である尊いかしらを敬います。名誉と恥の文化においては特にそうです。恥と不名誉は神にかかわるものではなく、文化にかかわるものです。
- **男性と女性の違いは、見分けられるままであるべきです。**
- 男性と女性は互いに依存し合っており、階層も、価値や序列の違いもなく、互いに補い合います。
- **神の栄光と誉れが第一です。 礼拝では、何ものも神から注意をそらしてはなりません。**
- パウロはこの男女のテーマを一つの文にまとめています。それは同等の地位を簡潔に言い表しており、集められた教会、礼拝においても当てはまるものです。
- 女が男から出たのと同じように、男も女によって生まれるのです。しかし、すべては神から出ています。 [コリント人への手紙第一11:12]

この複雑な段落には、もちろん、ちょうどその真ん中にあるこの10節（あるいは12節）だけよりもずっと多くのことが含まれています。

そこで、テモテへの手紙第一2章のときと同じように、私の段落全体の説明的な意訳を載せます。私なら手短にこう説明するでしょう。

コリントの皆さん、私が大切だと思うのは、皆さんに次のことを心に留めていただくことです。すべての男の起源、つまりかしらはキリスト、メシアです。この方によってアダムが造られ、アダムとともにすべての男が造られました。男として、皆さんはこの方に属しているのです。

女のかしらは男です。エバは彼のわきから形造られました。彼と一つになるためです。彼がかしら、彼女がからだです。男は彼女の起源であり、彼女もまた、妻として、助け手として、補う者として、彼に属しています。

同じ関係はキリストにも見られます。キリストのかしらは神です。神は、キリストが人となられたとき、ご自分の御子、ご自分と等しい方を生まれさせたのです。

コリントで男が集会の中、声に出して祈るときや預言のことばを語るときに頭を覆っているなら、それは恥ずべきことです。そうすることで彼は、自分のかしらであるキリストではなく、自分に誉れを集めてしまうのです。偶像の礼拝者たちは、偶像にいけにえをささげる際に頭を覆います。頭をあらわにすることで、男は謙遜を示し、目に見えないキリストに誉れを帰すのです。

女ではそれが反対になります。集会で祈ったり預言のことばを語ったりするのに頭を覆わない女は、自分のかしらの顔に泥を塗ることになります。自分自身にも、自分のかしらである夫にも、恥をかかせるのです。髪をほどいたままで、神とキリストにではなく、自分に人の目を引きつけるからです。

女はかぶり物をしなくてよいとだれかが求めるなら、その人は事を最後まで考えていません。皆さんも知っているように、コリントでは、覆いをしない女は髪をそり落とした女のように見なされ、身を売る女や、性的な出会いを求めている女と同じように見られるからです。人前で身を包まず、頭を覆わないのなら、理屈から言って、髪を切るか、すっかりそってしまえばよいということになります。

皆さんが、その要求によってそんなことを目指しているのではないことは分かっています！　けれども、皆さんが生きている社会では、そういう結果になるのです！　ですから、皆さんのところに来る人々が、人前で覆いをするという普通の習慣が拒まれているのを見て、つまずくようなことにならないよう、危険を冒さないでください。

礼拝の場、神の御前では、男は身を覆うべきではありません。男は神のかたちであり、神の栄光を映し出す者だからです。女も神のかたちです。けれどもそのうえ、

女は男の栄光を映し出す者でもあります。彼女の美しさは夫の美しさです。彼女は夫から造られ、夫と一つだからです。

では、どうして女が男の栄光になったのでしょうか。もちろん、男が女から造られたからではありません。女が男から、男のわきから形づくられたからです。また、女が男の栄光であるのは、男が女のために造られたからでもありません。逆です。女が男のために造られたのです。男はひとりで、助けを必要としていたからです。

ですから、女はそれほどの価値を持ち、男にとってそれほど大きな祝福であるからこそ、自分の頭について自分で決め、それを覆うかどうかを自分で決めてよいのです。だれも彼女にそれを指図してはなりません。夫も教会の指導者たちも、かぶり物をしないように（あるいはするように）彼女に指図してはなりません。彼女はいつの日か、御使いたちをさえさばくのです。それなら、この事柄についても決めることができ、また決めてよいはずです。

それでも女は、自分で決める自由の中にあっても、夫から独立しているのではないことを心に留めるべきです。男がいなければ女は存在せず、女がいなければ男も存在しません。神が初めから思い描いておられたのは、男と女が寄り添い、ともに歩むことでした。かしらとからだが一つであるように、二人はともに、心を一つにして、互いに従い合い、補い合って行動するのです。

片方がもう片方なしには存在しないとは、どういう意味でしょう。最初の夫婦がどのように造られたかを、思い返してみてください。はじめ、女は男から、男のわきから取られました。彼女は男のもとに連れて来られ、ふたたび男と一つの肉になりました。でも、その先も考えてみてください。そのとき以来、どの男も女から生まれてきました。男がいなければ女はいなかったし、女がいなければ男もいません。二人は同じ尊厳と同じ価値と同じ立場を持ち、違っているからこそ互いを完全に補い合うのです。これはみな、神が考え出されたことでした。すべてがそこから生まれ出たかしらは、神なのです。

そこで皆さんに問います。女が人前で、身を包むことも頭を覆うこともせずに神に祈るのは、礼儀にかなっているでしょうか。コリントとローマ帝国の風習からすれば、かなっていない――皆さんもそう認めるでしょう。人にとって、ほとんど自然の掟のようになっている習わしがあるものです。男が世間の習わしに逆らって髪を長く伸ばせば、恥とされます。ここでも女はちょうど反対です。長い髪は女の誉れであり、生まれつきの飾りとして人の目に映ります。女が男の栄光であるために、長い髪は美しいベールかマントのように与えられているのです。

男の目にはこれほど魅力的に映るこの飾りを、女は集会では覆っておくべきです。集会は、この栄光で目立つための場所ではありません。それは、男が頭をあらわにして謙遜を表すべきなのと同じことです。大切なのは、神とキリストの誉れと栄光なのですから。

コリントでだれかがこの件で議論を始め、かぶり物の習わしにけちをつけようとするなら、そういうことはどこでも行われていない、と本人がわきまえるべきです。皆さんが女たちにかぶり物を禁じようとしているようなことは、です。そんなことをしている教会は一つもありません。ですから、かぶり物について一般に通用していること、品位にかない、だれのつまずきにもならないことを守ってください。

13 かしらとしての夫――一方的な服従？

パウロとペテロは、少なくとも七回、妻たちに夫に従うよう呼びかけています。夫が信仰を持っていなくても、愛情深く振る舞っていなくてもです。当時、女性がそのように振る舞わなければならないのは、まったく普通のことであり、何も新しいことではありませんでした。夫は家の主人でした。彼が家を治め、妻（たち）、子どもたち、奴隷たち、その他の同居人はみな、彼の下にありました。偉大な哲学者アリストテレス（Aristoteles）は、古代の家をそのように秩序づけました。上から下へ、明確な階層をもってです。人々はそのように生き、それが帝国と古代社会に安定と秩序を与えていました。そこから外れることは許されませんでした。それは聖書の理想ではありません。聖書は男性と女性を、階層のない対等なパートナーとして描いているからです。しかし、堕落の後に予告されていたとおりに、事態はそうなってしまったのです（創世記3:16）。 福音がローマ帝国全体で出会ったのは、まさにこの社会構造でした。

なぜ服従がこれほど強調されているのでしょうか。そして、それは今日も同じように当てはまるのでしょうか。 多くの女性は、自分の役割を耐えがたく、出口のないものと感じていました。できるかぎり折り合いをつけていました。たいてい夫よりずっと若く、夫の所有物であり、発言権もなく、自由もほとんどなく、権利もありませんでした。恋愛結婚などありませんでした！　服従は喜びというより、重荷であり強制でした。今、イエスを告白する者として、彼女たちはイエス・キリストとの生きた関係に入りました。今やこの方とともに生き、主に対するように心から夫に従うことを学ぶことができるのです。 福音が彼女たちにもたらした自由、そして女性として取り戻させてくれた尊厳は、夫に逆らう口実になる必要はありませんでした。使徒たちは、こうした振る舞いによって、当時の社会の中で福音が悪く言われないことを非常に重んじていました。

この古代世界では、家の主人である夫が妻のかしらとして現れます。すでに述べたように、それは聖書の理想ではなく、それ以上評価されることのない生活の現実です。しかし、それは新しく定義し直されます。新約聖書のどこにも、男性に、よく治めよ、賢く支配せよ、とは命じられていないからです。かしらであることは、主イエス・キリストの模範のもとで、新しい定義を与えられます（エペソ5:21-33）。

かしら、つまり夫は、妻を自分自身のように愛し、自分を犠牲にするまで愛すべきなのです。妻を養い、いたわるべきなのです。

これらのことばが集まった家の教会で読み上げられたとき、古代の家に住むすべての人が直接語りかけられました。それだけでも異例のことでした。しかしそれだけではありません。パウロが男性たちに求めたことは革命的だったのです。夫婦が互いに、また子どもや奴隷に対してこのように振る舞うことで、家の家父長的な構造は、一種の「愛の家父長制」になりました。こうして男性と女性の関係の構造は、神が初めに望まれたものに近づき始めたのです。当時の社会構造を攻撃することなしにです。そうしていたら、福音はこの上なく大きな損害を受けたでしょう。堕落した世界のこうした固い構造は、キリストの愛によって内側から崩され、和らげられ、変えられていきます。

同じことは、回心した奴隷たちにも当てはまりました。彼らは自分の主人に従うべきでした。今日、使徒たちのこのことばを使って奴隷制を正当化しようと考える人はいないでしょう。キリスト者は19世紀までそれもしていたのです。古代において、奴隷制は社会の固い、生存にかかわる構成要素でした。今日の私たちには、もはや想像もできません。奴隷制は決して神のみこころではありませんでした。それは人間を侮辱するものです。それでも、回心した奴隷は今、主に仕えるように心から仕えるよう求められています。同じように主人たちも、自分の奴隷に親切に振る舞うよう求められています。まして奴隷の多くは今や彼らの兄弟なのですから。キリストにあっては、もはや自由人も奴隷もありませんでした。

使徒たちが古代の家の秩序を、この組み合わせ（夫、妻、子ども、奴隷）において取り上げていることは、これらの指示が私たちに宛ててではなく、私たちのために書かれていることをはっきりさせています。違いは、今日の私たちの社会構造には、もはや奴隷制もなく、pater familias、すなわち支配する家父のいる古代の家もないということです。男性と女性は法律上同等の権利を持っています。そのことを私たちはただ感謝するばかりです。今日では、シェアハウスも、単身世帯も、老人ホームもたくさんありますが、当時はそれらはなく、したがってそれに対応する使徒たちの指示もありません。

パウロは、家の支配者は pater familias ではなく、キリストこそすべての者の主であることをはっきりさせています。すべての人は、まずこの天の主に対して責任を負っているのです。

では、これらの指示を私たちはどう受け止めればよいのでしょうか。

広く行き渡っている見方は、女性の服従は創造の秩序に根ざしている、というものです。しかし唯一の良い秩序は、堕落の前の秩序です。階層もなく、男性がかしらであることもなく、女性の一方的な服従もありません。堕落の後になって初めて、男性が不当に、委任もなく女性を支配する無秩序が生まれたのです。それがいつも、根本的に悪かったと言うつもりはありません。しかし、奴隷制と同じように、それが戻ってきてほしいと願う人はいないでしょう。ですから私たちは、これらの聖書のことばを、実際にその歴史的な背景の前で理解しなければならないのです。

それは、すぐにそう結論づけられがちなように、もはや神のことばを真剣に受け止めないということではありません。むしろ反対です。服従と愛についてのこれらの指示がそのように生きられるなら、それは神の理想にかないます。しかし、パウロとペテロ自身が提案している、もっと良い道があります。パウロは互いに従うこと（エペソ5:21）について語り、それが実践される一つの例として、結婚の関係を挙げています。**実際、妻も夫を愛すべきです。新約聖書でそれが求められているのはただ一度だけですが。そして同じように、夫も妻に従うべきです。ペテロが3章7節で「同じように、夫たちよ」と言って、妻たちに服従を求めている3章1節を受けているのは、そういうことです。さらに彼は、私たちがみな互いに対して謙遜を身に着けるべきだと言っています（ペテロ第一5:5）。**

今日の結婚を、古代と同じように生きることはできません。それを弱めた形で試みる人々もいます。**しかし、服従が誤解された創造の秩序によって根拠づけられるなら、それは聖書的ではありません。たとえそれがうまくいっていたとしてもです。**キリスト者の服従（つまり信仰を同じくする者どうしの服従であり、信仰を持つ夫と妻の間の服従も含みます）は、奴隷的なものでも、尊厳を奪うものでもありません。それは、へりくだった、誠実で、愛に満ちた敬意であり、協力であり、支えです。謙遜や柔和と同じように、服従はキリスト者の普通の性質であるべきです。そして理想的には、互いのものであるべきなのです。

私は自分自身について、そしてほかの男性たちにも見てきたのですが、私たちはこうした呼びかけを、一方的な服従として、何も感じずに受け入れてしまっていました。何しろ関係しているのは女性であって、男性ではないのですから。私たちは、教えられたとおりに、また自分の教会で、部分的には社会の中で身につけてきたとおりにそれを理解しています。残念ながら、それは私たちの心の傾きを表しています。

女性が一見して制限されているとき、なぜ私たちははっとして、該当する聖書箇所をどう理解すべきかを問わないのでしょうか。もし自分に向けられていたら疑問を投げかけるようなことでも、私たちはたやすく受け入れてしまいます。心を変えていただき、イエスとパウロのもとで学び直しましょう。

14 男性も女性もない

ガラテヤ人への手紙3章28節は、男女の役割が話題になるとき、よく引き合いに出されます。

> [ガラテヤ人への手紙3:26-28] あなたがたはみな、キリスト・イエスに対する信仰によって、神の息子たちなのです。キリストにつくバプテスマを受けたあなたがたはみな、キリストを着たのです。
>
> ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由人もなく、男と女もありません（男性的なものも女性的なものもありません）。あなたがたはみな、キリスト・イエスにあって一つだからです。

私はよく、こういう話を耳にします。パウロはここで救いについて語っているのであり、その救いは、ここに挙げられたすべての民族的・宗教的な集団に、そして最後に両方の性に、区別なく開かれているのだ、と。問題になっているのはキリストにある在り方であって、堕落した創造の中での私たちの現実の生活ではない、そこではこうした違いは依然として存在している、というのです。

しかし、パウロは手紙の冒頭で何を取り上げているでしょうか。ペテロとユダヤ人たちは、異邦人から離れて、別々の食卓に着いていました。それが、ガラテヤ人への手紙3章28節が扱っている問題でした。つまり、この節が解決しようとしているのは、まったく実際的な教会の問題なのです。

確かに、私たちは今ある自分のままです。しかし、すべての人に、人種や階級や性別において私たちがそうであるものよりも大きなものが加えられます。それが息子としての身分です。パウロは古代の、息子としての身分について語っています。それには特権と尊厳、権利と相続が含まれていました。娘たちには、それは当てはまりませんでした。神の息子としての身分を、パウロは信じる者たちに、男性にも女性にも認めているのです！

ユダヤ教において、救いは、そして古い契約においてそれと理解されていたものは、ここに挙げられた集団にすでに開かれていました。ギリシア人は、割礼を前提として、改宗者として受け入れられました。イスラエルの民の中には、男性と女性がいたように、自由人と奴隷もいました。そうだとすると、パウロはあまり新しい

ことを言っていないことになります。救いという観点からのこの説明は間違ってはいませんが、それがすべてではありません。

もっと大きなこと、すなわち人間観が問題になっているのです。この28節が核心において言っているのは、すべての人が神のかたちであり、みな同じ尊厳を持ち、罪人として同じ問題を抱えているということです。人はみなキリストを必要とし、キリストを受けるのです。この三つの対は、さらに続けることができるでしょう。老いた者と若い者、貧しい者と富んだ者、強い者と弱い者、子どもと親、障がいのある人とない人、儀式上きよい者と汚れた者。ガラテヤの人々にとって、今やユダヤ人も異邦人もメシアの家族の中でみな等しく、みな一つであるということが第一に来るのは、うなずけることです。みな神の息子たちなのです。教会では、私たちはだれに対しても、神の息子として向き合います。なお残っているほかのすべての違いは背後に退き、もはや私たちの互いの行いや言葉を決めることはありません。

パウロがこの三つの組を挙げているのは、それらが贖われていない世界で互いに緊張関係にあるからです。教会の中では、こうした違いが争いの種になってはなりません。 ユダヤ人は自分たちを神に選ばれた民と考え、異邦人を見下していました。割礼を受けなければ、異邦人は神の民に属することができませんでした。奴隷は搾取される所有物でした。何の価値もなく、発言権も権利もありませんでした。当時の女性もまた所有物であり、男性より劣った者とされていました。彼女たちにも発言権はなく、権利もわずかでした。キリストにあって、私たちは今、神がいつも望んでおられたように互いに向き合います。すべての人が、バプテスマと信仰によってキリストを告白する者となります。社会的、民族的、階層的な違いはすべて、キリストにあって終わっているのです。 教会には、もはや兄弟と姉妹しかいません。そこでは神の目の前で、こうした違いがもはや何の役割も果たしてはならないのです。女性と男性が同じ尊厳を持っているなら、両者とも教会にあるすべての奉仕を担うことができます。これは論理的な結論です。この節が奉仕について語っているわけではないとしても。

パウロはここで、創世記1章27節の「男と女」という表現を取り上げています。彼は、一種の性別のない存在を主張しているのではありません。コリント人への手紙第一11章で彼は、女性は礼拝で祈ったり預言的に語ったりするとき、目に見えて女性として現れるべきであり、男性は男性として見られるべきだと主張しています。パウロは、異教の文化や礼拝の慣習の中で性別が意図的に覆い隠されたり、消し去

られたりさえしていたさまざまな側面を知っていたのかもしれません。しかし、ここで問題になっているのはそのことではありません。

創造の秩序と救いの秩序がぶつかり合うことはありえません。救いの秩序は、神が望まれた初めの創造の秩序を取り戻すのです。 その中で、男性と女性は同等の地位にあります。福音には、人を癒やす力があります。まず教会の中で、つまり信じる人々の間で。それは前向きな、根底から覆すような変化です。それは救いの力であり、何千年来の罪深い仕組みをほどき、文化や民族全体を変え、救うことができるのです。結局のところ、奴隷制の廃止も、私たちの民主主義も、私たちの自由の権利も、男女の同権も、パウロのこのことばにもさかのぼることができます。それらは長い時間をかけて、社会に影響を及ぼしてきました。男性と女性の役割に関して、教会がそれに後れを取るべきではありません。

この節はこうした役割について語っているわけではありませんが、何の関係もないとは言えません。この節は土台です。その上で姉妹たちは自由に、区別も一方的な服従もなく、自分に賜物と力が与えられているどんな奉仕でも担うことができるのです。 そのために必要なのは割り当て制度ではなく、へりくだった、賢明な互いの接し方です。

ガラテヤ人への手紙3章28節は、心に刻み込まれなければなりません。神は偏見をもって人を見られません。それなら私たちもそうすべきではありません（ローマ2:11、ヤコブ2:1）。

15 私たちの罪の告白

「男らしい兄弟たち」――それは何でしょうか。コリント人への手紙第一16章13節で、パウロは姉妹たちと兄弟たちに、男らしく、雄々しく、強くあるよう勧めています。それは女性らしさに対立するものではなく、臆病な振る舞いに対立するものです。ここでは「男らしく」を次のように解釈したいと思います。私たち男性は、キリストにある姉妹たちに対して、とうに果たすべきだった罪の告白をあえて口にし、それにふさわしい行いを続けることによって、男らしくあらねばならない、と。私たち男性は、解釈の主導権を自分のものとし、それとともに行動の主導権も自分のものとして、女性たちを教会の奉仕から締め出してきました。

私たちは神に仕えているつもりでしたが、実際にはその反対をしていたのです！

男と女をお造りになった神、ヤハウェ・エロヒム（Jahwe Elohim）よ。姉妹たちは私たちと肩を並べる者ではなく、私たちより下の者だ――私たちはそう考え、そう求め、そのとおりに振る舞ってきました。お赦しください。私たちにとって彼女たちは、向かい合う相手ではなく、一段下の存在でした。

主イエスよ、女性は黙っていなければならない、人前では控えていなければならないと私たちが考えていたことを、お赦しください。

彼女たちが公にあなたとあなたの真理を宣べ伝えることを、あなたは望んでおられないと私たちが考えていたことを、お赦しください。

愛する姉妹たち、私たちが神から出た、聖書的なものだと思い込んでいたこの誤った姿勢を、どうか赦してください！　私たちが、いくつもの場面で、正当な理由もなくあなたがたに良心の呵責を負わせてきたことを、赦してください。

大事な事柄も問いも、あなたがたを抜きにして話し合い、決めてしまいました。赦してください。あなたがたの意見を聞こうともしなかったのです！

私たち男性は失敗しました。私たちはしばしば、自分でも気づかないうちに、自分本位で、支配的な知ったかぶりでした。自分自身が見えていませんでした。あなたがた女性のことも、あなたがたの召しと賜物のことも見えていませんでした。

私たちが臆病で、あなたがたを前に押し出し、あなたがたに頼ってきたことを赦してください。本当は私たちが男として踏みとどまり、先に立って進むべきところ

で、あなたがたも当然それを期待していたのに。

あなたがたが重荷に感じてきたこと、どうしても納得できなかったことに、私たちは関心を払いませんでした。赦してください。それをどう受け止めているのか、一度も聞いたことがありませんでした。こうした差別的な態度や教えをあなたがたがどう感じているのか、尋ねもしなかった私たちを、赦してください。

申し訳ありませんでした。私たちが間違っていました。

自由になってください！　喜んで主に仕えてください！

私たちはあなたがたを支えます――私たちがしてきたことにもかかわらず、あなたがたがいつも私たちを支えてくれたように。

16 結びに

聖書だけを唯一の基準とする多くのキリスト者は、「女性の問題」にとうに決着をつけ、姉妹たちのために道を開いてきました。私の人生では、残念ながらこの認識はとても遅くやって来ました。ですから、この本も実は時代遅れなのです。教会生活のあらゆる分野で、私たちが姉妹たちの奉仕なしにはやっていけないことは、とうにはっきり認められているべきだったからです。私たち男性が男性と女性の階層的な見方にしがみつくなら、自分自身を傷つけるだけです。しかし、確信を改めるのに遅すぎることは決してありません。

この本で取り上げている問いは、多くの場所でとうに決着がついており、私は遅れてやって来た者にすぎません。戦いはとうに終わっています。ほかの人々が、この30年の間、この前線で戦ってきました。その人たちの神学的な研究から、私は非常に多くのものを得ました。

教会には、もっと根深いテーマが迫っています。性の問題を大きく揺るがすテーマが、今日では議題に上り、社会の目に大々的に持ち込まれています。たとえばトランスセクシュアリティです。それに対して、私たちキリスト者は社会の中で答えを持っていなければなりません。私たちキリスト者は、二つの性という神のお考えがすばらしいものであり、守られなければならないことを高く掲げなければなりません。しかし、女性が教会で話したり教えたりしてよいかどうかをまだ議論しているなら、私たちはあらゆる意味を決定的に失い、本当に今日的なテーマについても、もはや真剣に受け止められず、耳を傾けてもらえなくなるでしょう。

そうした今日的なテーマの一つがトランスヒューマニズムです。それは人間を、聖書とはまったく違うふうに定義しています。そこでは性の問題よりもはるかに多くのことが問われています。ここで私たちの目の前に、新たなバベルの塔が姿を現しつつあります。それは、聖書が私たちに描いている終わりの時の姿に当てはまるものです。

「この世に、結婚と家庭と教会において、男性と女性が愛し合ってともに生きる姿を示すキリスト者になりましょう。混乱し、方向を見失った社会、正直で本物の役割の手本を探している社会の中で、希望を担う者になりましょう。相手の性に対する敬意と尊重によって際立つ手本になりましょう。そうしたときに、そしてそうし

たときにだけ、今日の人々は私たちに目を留め、私たちを真剣に受け止めてくれるのです。」

ガブリエーレ・ジンガー（Gabriele Singer）

男として、女として

愛し、導き、教える

一緒のほうがいい！

ともにいるほうがいい！

互いに支え合うほうがいい！



「神のことばを読むと、私には次のことが見えてきます。男の手を借りずに一人の女性から宿られたイエスは、女性たちの口をふさぐどころか、むしろ語るように促されました。パウロがガマリエルの足もとに座ったのと同じように、一人の女性がラビの足もとに座って学ぶことを、イエスは喜んで認められました。また、ご自分に対して大切な祭司的な務めを一人の女性に果たさせ、埋葬に備える油注ぎを彼女から受けられました。十字架のもとに最後まで残ったのも女性たちなら、墓に最初に駆けつけたのも女性たちでした。十字架上の七つのことばのうち五つは、女性たちだけが証言し、伝えたものです（ローマの兵士たちは別として）。救いの歴史の最も大切な節目は、ただ女性たちによって証しされました。イエスは復活の後、わざわざ女性たちに会い、ご自分がよみがえったことを兄弟たちに知らせるよう、彼女たちに託されました。贖われた神の教会において女性が完全に等しい者であるこ

とこそ、神の初めからの、決して変わらないご意図なのだ――それをきっぱりと示すために、イエスにこれ以上何ができたでしょうか。」クリスティアン・ベーゼ（Christian Beese）

キリスト者の男性たちの女性観は、治る見込みのない病のように、また大昔から深く根を下ろして広がり続ける雑草のように、初めから周囲の世界をこだまさせてきました。残念なことに、自分たちの心をもこだまさせてきたのです。それが自覚的であれ無自覚であれ、ひどい形であれ穏やかな形であれ、愛情のこもった形でさえあれ、取るべき道は一つしかありません。聖書の真理、つまり神の真理へと立ち返ることです。人を自由にするのは、その真理だけです。

Hans-Jörg Ronsdorf

「家父長制的なものの考え方から、女性を大切にするものの考え方へ移っていくのは、平らな道ではありません。そのためには、自分がわかっていると思い込んでいたあらゆることを、一から思い描き直す必要があります。私たちの世界とその動き方について、私たちの信仰と神との結びつきについて、人と人との結びつき、そしてこの宇宙との結びつきについてです。この転換の難しさは、かつて私たちの祖先が、地球を中心とする宇宙の見方から、太陽を中心とする見方へ移らなければならなかったときに劣りません。地球が太陽の周りを回っているのであって、その逆ではないと最初に唱えた学者たちは、破門されました。それが神の力を脅かすと信じられたからです。同じように、家父長制的な世界観から抜け出すのもたいへん難しいことです。そこでは、女性が男性に導かれ、支配されることも、さまざまな制度や組織を男性が整え、率いることも、当たり前として受け入れられているのです。対等で平等主義的な世界観とは、女性と男性を互いに結ばれた者として見る世界観です。二人は力を分け合い、相手の賜物を見いだし、育て、解き放ちます。そして同じ敬意、同じ尊厳をもって向き合うのです。」バーバラ・リード（Barbara Reid）

「福音の霊に心を捕らえられた人なら、だれでもうなずくはずです。女性を半人前扱いし、神の国のために働けないようにしてしまう家父長制的な役割観は、不正であるばかりか、神の教会にはかり知れない痛手を与えてきました。たとえそれが、卑しい動機や主導権争いの思いから、ましてや故意に女性を低めるために行われたのでは決してなく、多くの場合、聖書の痛ましい誤解から生じたのだとしても、今こそ勇気をもって、人の尊厳を傷つける伝統を問い直し、それに背を向けるときです。そうすれば女性たちもまた『広い所』に足を置き、イエス・キリストが勝ち取

ってくださった完全な救いを、ついに感謝をもって味わうことができるのです。」
ハルトムート・クリューガー（Hartmut Krüger）

聖書の本文の文化的な背景を見ないようにしても、本文の文言を守ることにはなりません。かえって聖書の文言は、たびたび――いや、たいていの場合と言ってもいいかもしれませんが――自分の時代の文化的な思い込みを映し出す幕になってしまうのです。多くの福音派の人々が永遠の聖書の真理として教えられてきたものは、実は19世紀と20世紀に生まれたものです。ですから、教会の奉仕において女性が同じ権利を持つことを求めるのは、今日のフェミニズムという時代精神に従うことではありません。そちらでは、とっくにもっと遠くまで及ぶ要求が問題になっているからです。20世紀まで続いてきた役割を入れ替えること、あるいは性そのものを解消してしまうことが問題になっているのです。何十年もの間、教理的な告白や確信を押し通すことばかりを練習し、そのために戦ってきた人が、意見の分かれる問題について、異なる立場をまじめに話し合うことさえ、どうやって学べるというのでしょうか。

トルステン・ディーツ（Thorsten Dietz）

17 著者のその他の本

以下の本はいずれもドイツ語で出版されています。かっこ内は日本語訳の書名です。

Und die Toten leben doch（それでも死者は生きている）、Bielefeld、1992年

Seitenwechsel – Von Adam zu Christus（陣営の転換――アダムからキリストへ）、Bielefeld、2011年

Entrückung, Himmel, Ewigkeit – Ein neuer Blick auf alte Themen（携挙・天国・永遠――古いテーマへの新しいまなざし）、Nürnberg、2015年

Gottes Lamm, Golgota und die Ewigkeit（神の小羊、ゴルゴタ、そして永遠）、Wuppertal、2015年

Fantastische Himmelwelt, Lehre und Leben der Himmelwelt im Epheserbrief（すばらしき天上の世界――エペソ人への手紙における天上の世界の教えと生き方）、Nürnberg、2016年

Gott spricht, Eine erklärende Übertragung der allgemeinen Briefe und der Offenbarung（神は語る――公同書簡と黙示録の解説的翻訳）、Sulzberg、2017年

Epheser, nacherzählt, erklärt für heute（パウロのエペソ人への手紙――語り直し、解き明かし、今日のために）、Sulzberg、2018年

Gods good Gospel, Gottes gutes Evangelium（神の良き福音）、Sulzberg、2019年

Markus, nacherzählt, erklärt für heute（マルコの福音書――語り直し、解き明かし、今日のために）、Sulzberg、2019年

Galater, nacherzählt, erklärt für heute（パウロのガラテヤ人への手紙――語り直し、解き明かし、今日のために）、Sulzberg、2020年

Die Briefe des Johannes, nacherzählt, erklärt für heute（ヨハネの手紙――語り直し、解き明かし、今日のために）、Sulzberg、2020年

Frauen, vergebt uns! – Die Rolle von Frau und Mann（女性たちよ、私たちを赦してください！――女性と男性の役割について）、Sulzberg、2020年

Ein König voller Pracht – Die gute Botschaft von Jesus, dem Messias（栄光に満ちた王――メシアであるイエスの良い知らせ）、Augsburg、2022年